

# 近代中国研究委员会報

1958年3月

No. 4

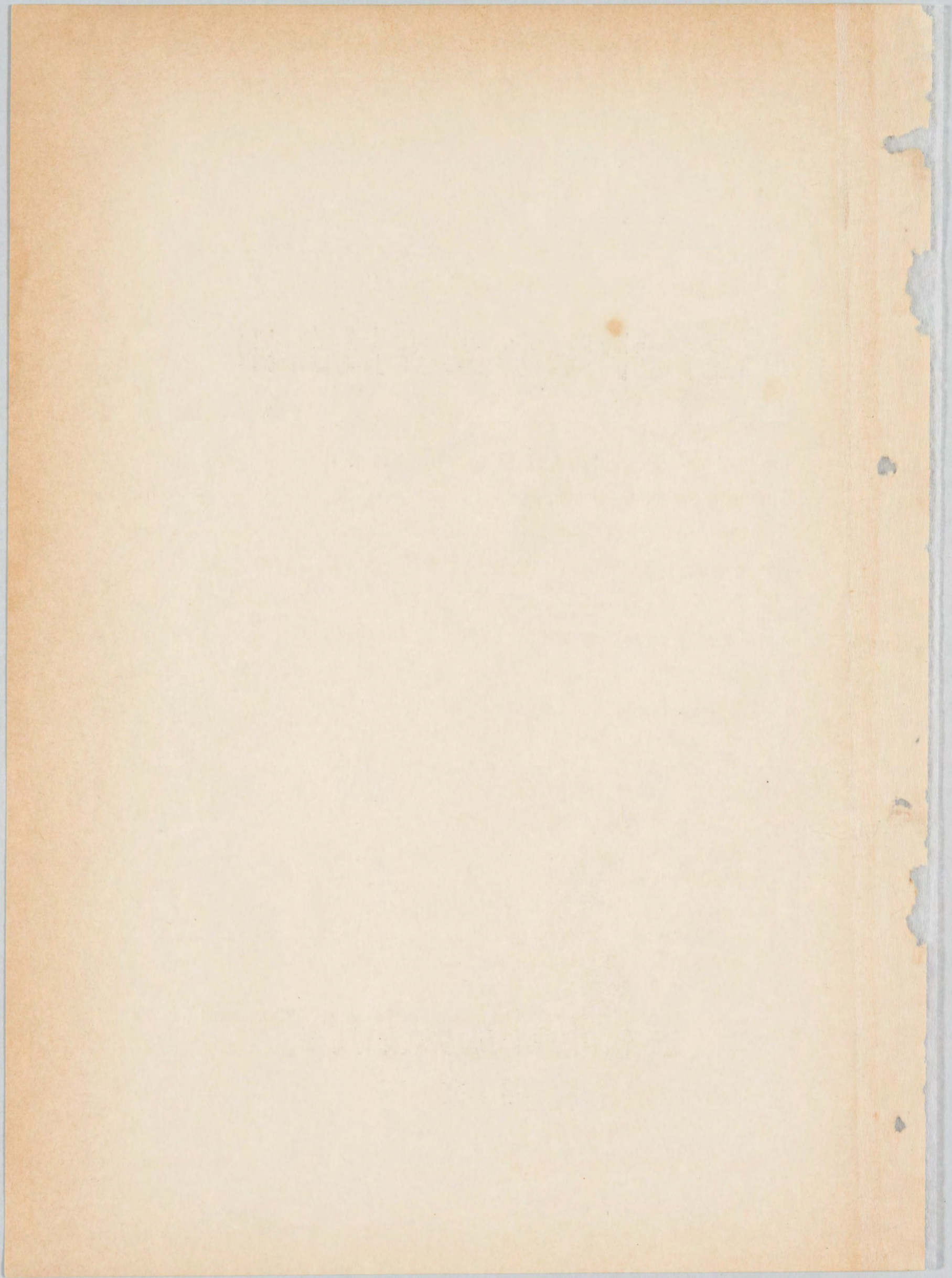
近代中国研究委员会



東洋文庫

(N<sub>2</sub>)





目 次

研究計画	1
○ 定例研究会	21
研究員研究活動	22
研究員動静	24
「近代中国研究」の創刊	25
目録・索引の編修状況	25
内外ニュース	29
京都における中国近代史研究 (里井彦七郎)	29
中国研究所の研究会 (幼方直吉)	30
中国近代思想史研究会 (野村浩一)	30
セント・アントニーズ・カレッジの極東研究 (坂野正高)	31
ハーヴァード大学の中国政治経済研究	33
佐々木正哉君の議院図書館便り	36
批評と紹介	40
Columba Cary-Elwes: China and the Cross (矢沢利彦)	40
Wolfgang Franke: Chinas Kulturelle Revolution (野村浩一)	44
Eugene Wu: Leaders of Twentieth-Century China	50
John K. Fairbank (ed.): Chinese Thought and Institutions	50
Franz H. Michael, George E. Taylor: The Far East in the Modern World	52
Franklin W. Houn: Central Government of China, 1912 - 1928	52
G. William Skinner: Chinese Society in Thailand	53
Horace E. Hamilton: China, Two Generations Ago	53
麦若騷: 黄遵憲伝	53
呉鉄城: 四十年来之中国与我	54
周善培: 辛亥四川争路親歴記	55



中国人民政治協商会議湖北省委員会編：辛亥首義回憶錄	56
楊玉如：辛亥革命先著記	58
中国僑政学会：華僑問題資料目錄索引	59
東方学会：近百年來中国文獻現在書目	59
東京都立大学中国文学研究室：茅盾評論集第一集	60
高橋勇治：中国人民革命の研究	60
加地信：中国留用十年	61
1957年度近代中国研究論文目錄	62
日本文	62
中国文	68
文獻解題（佐々木正哉）	77
周延初「周夢坡先生年譜」	77
曾紀芬「崇德老人八十自訂年譜」	77
蔡鐸「蔡松坡先生遺集」	78
羅光「陸徵祥」	80
鳳岡等「三水梁燕孫先生年譜」	80
「葉遐菴先生年譜」	81
衛聚賢「中国的幫会」	82
衛聚賢「江湖話」	84
資料紹介	85
日本政府の民報発行停止命令に対する章炳麟の反駁	85
進徳会	86
平民商会	88



## 《 研究 計 画 》

わたくしたちは、第1期2年の研究を、1956年11月に終え、それから新しく  
星井彦七郎（京都大学）、小山正明（北海道大学）、野村浩一（東京大学）の三研究  
員を加えて、第2期3年の研究をはじめました。以下その研究計画を記します。なお  
牧野巽、山本達郎両委員は、しばらくの間は、もっぱら研究指導にあたることになり  
ました。

### 軍 閥 の 系 譜

市 古 官 三

近代中国100年のうちで、いちばんわからない時代は民国初年といつていいでしょう。民国  
初年の研究は、わずかに思想、文芸の面で多少ある程度であつて、全般的にみれば、まず何もし  
ないといつていい状態です。

それでこの時代の研究は、これから大いにやらなければならないと思うのですが、そういう時  
代であるだけに、研究にとりかかるのも、また容易ではありません。そこでわたくしはまず、この  
時代の人と人との関係を調べてみようと思います。人と人との関係は、政治、経済、社会、文化  
いずれの面を考えるにあいにも、まず知る必要があると思うからです。もつとも、漠然と人と人  
との関係といつても、とりとめがなくなつてしまいますから、当面は軍閥の中心人物を対象とし  
て、次のようなことを調べてみるつもりです。

1. 父祖の交友関係はどうであつたか。
2. 青年時代（清末）には、誰を師とし、誰を友としたか。
3. その地方の民衆とのつながりはどうであつたか。
4. その地方の郷紳とのつながりはどうであつたか。
5. その頃の文化人とのつながりはどうであつたか。
6. その頃の資産家とのつながりはどうであつたか。
7. その頃の政治家とのつながりはどうであつたか。
8. 他の軍閥との関係はどうであつたか。
9. 外国勢力とはどのように結びついていたか。

研究はまず、軍閥時代に活躍した人々の年譜・伝記・日記・文集・全集の類を集めることから

はじめます。その文献は多く中国文のものになりましょうが、特に日本側のものに注意します。このようにして集めた文献の中から、上記9項のことを知るのに役立つような資料を求めて、軍閥の系譜を明かにしたいと思つています。

### 中国共産党の抗日政治戦略（1935 — 37）

衛 藤 濬 吉

まさに潰滅に瀕した中共は、江西省の基地を放棄して長征に出て一応の血路打開に成功し、さらに長征の途次抗日救国のいわゆる八・一宣言を発して全国的大アジテーションを行うことにより、全中国の青年および知識人に大きな共感をよびおこした。ここに中共は、「抗日」を心理的支柱として大衆ことに中間層を自己の陣営にひきつけて同士乃至同調者とし、保安（後に延安）を中心とする陝甘寧辺境地区の天険によつて再び根拠地の確立に成功した。この時期以後中共はその全組織を動員し、かつ多くの譲歩を行いながら、抗日民族統一戦線の結成、すなわち、全中国の諸階層諸グループをうつつ一丸となして抗日の一線に整列せしめる運動をおこす。つとに中共の運動に注目し調査をおこたらなかつた日本外務省は、この国共妥協の動きに対処すべく1936年1月かの広田三原則（日華提携、日満華三国関係の調整、共産主義運動の防遏）を発表して国民政府との協調をはかつた。しかし、現地においては武力に過信する日本陸軍の過激な動きと民間日本人の利権主義とが広田三原則への不信感をかもしだし、かつ中国ことに華北における抗日運動を激化させつつあつた。日本、国民政府および中共の三権力が分立している極東の政治的状況のなかでは、極端な政治力の差がないかぎり、二権力が連合して他を孤立せしめんとはかることは基本的な政治戦略である。自己の武力の劣勢を知悉している中共がかえつて重大な譲歩を行つてでも、その存立のためには国府との合従の必要なることを痛感して、これが実践に心魂をくだいているとき、自己の武力の優勢に満々たる自信をもつ日本軍部は何れの権力との連衡もさほど必須な基本政略とは考えなかつた。当然に広田三原則は国府に無視され、36年末の西安事変によつて国共合作は急速度に進展しはじめる。

一方東京政府内部では、二・二六事件を契機として陸軍の主導権が確立し、ますます中国に対して柔軟性を欠いた態度で臨み、ついに蘆溝橋事件を全中国におたる大戦争へと拡大してしまう。

この間における、国共妥協をもたらすために中共が行つた政治戦略および戦術、これに対する中国諸階層や国民政府部内諸グループの反応の態様、そしてさまざまな迂余曲折を経ながらも抗日統一戦線に結集されて行く経過、を報告するのが新しい年度の計画である。この場合、外圧と

しての日本側の対華諸政策の変動および変動をもたらした要因もできるかぎり詳しく探つてみたい。

### 清末に於ける立憲・共和の論争

小野川 秀美

ここに云う立憲、共和の論争とは、立憲君主派と共和派、改革派と革命派の論争を指している。革命派が擡頭するのは、義和団の乱後のことである。この乱を境として、改革派の内部に思想的な対立を生ずると共に、革命に対する共鳴者も若い知識層の間に起つてきた。その中心となるものが日本に來た留学生であつて、彼等は当時の急進的な改革論者梁啓超から強く思想的な影響をうけた。梁啓超によつて唱えられた新民説、及び彼によつて宣伝された進化論、民約論が彼等の心を捉え、更にその影響は中国の内地に及んだ。この意味に於て梁啓超は、若い世代の啓蒙に大いなる役割を果たしたと云わなければならない。然るにこの啓蒙思想は急速に民族思想と結びつき排滿と共和と破壊が急進的な若い世代の信条となつた。彼等が日本で発行した数種の雑誌は、初め梁啓超の思想的な影響下にあるものであつたが、逆に彼とは対立的な立場をとるに至つた。同時に梁啓超は、自ら蒔いた啓蒙思想の弥漫を前にして、急進から漸進にその態度を後退せしめるのであつて両者の論争はすでにここに胚胎していた。論争が本格化されるのは、革命派の諸勢力が中国同盟会に結集され、その機関誌として民報が発行されてからである。民報と梁啓超の主宰する新民叢報との間に、立憲と共和をめぐる論戦が展開された。時は日露戦争の直後であり、清朝に於ても何等かの形で君主立憲への方向をとらざるを得なくなつていた時期である。論争は清朝是認か清朝否認かという点に帰着せざるを得ない。それと共にこの論争を一契機として、革命派の内部に於ける思想的な対立も表面化してきた。それが如何なる性質のものであるか。論争の内容と経過を跡付けると共に、この点にも留意して検討して見ようと思う。

### 清朝社会の經濟構造とその変質

—とくに經濟面における地主の地位と機能について—

小山 正 明

重 田 徳

われわれに共通の関心と前提は、次の如くである。第一に共通の関心とは、1949年の人民共

和国成立に、一応、帰結する中国近代史の流れは、その母胎として、したがってまたその変革の対象としての清朝社会の構造的な理解なくしては、正当に評価できないし、したがって、世界史的な観点——これこそが、日中関係といった面を超えて、窮極的にわれわれの中国史研究を支えるものでなければならないが——での整序も行われえない。それ故、われわれは、当面、清朝の社会体制の基礎的構造を指定することを目的とするが、その際共通の前提となつているのは、通常、宋代に置かれているとみられる中国封建制の体制的設立期を、われわれは、明末清初の変革期に、更にいえば清初におこうとしている。（この際いうまでもないことであるが、ウクライナとしての佃戸制をそれ以前にみとめないというのではない。たゞこの佃戸制の評価については、われわれの間に見解の相違がある。）

この前提は、なお今後つづけて検証されなければならない仮説であるが、われわれは、当面、基本的な、あるいは誰の目にも明らかな事実を指標として、中国史の一見停滞的な流れに段階を設定することを必要な過程とみており、したがって、これは清朝社会構造解明の前提であると共に、また逆に、後者はその検証の一手段としてのいみをももっている。

かくして、われわれは清朝の社会体制をひとまず中国における封建制の確立と展開、乃至解体の問題として扱おうとしており、云うまでもなく、世界史的視点のよりどころをそこに求めている。

以上のような問題関心と前提に立つて、われわれが、当面、分析を意図しているのは、清代社会の、したがってまた中国封建社会の基本的階級関係と考えられる地主佃戸関係を体制としての社会関係に媒介する一つの契機としての市場、ないし、経済機構の問題であり、なかんずく、その中における地主の地位と機能を明らかにしながら、通常指摘される領主制の不成立という問題をからめつゝ、中国封建社会の特質に一つの照明を与えたいと考える。（以上重田担当）

更に、西欧資本主義の進出による経済構造の変化の追究が第二の問題であるが、それは当面、海關報告の統計的資料の分析を手がかりとしつゝ、その背後にある中国内地の生産・流通機構の変化が辿られるはずである。（以上小山担当）

## 日本統治下の台湾社会

神田信夫



## 世界市場と中国国内市場の発展

—とくに、日本の対中国進出—

佐伯 有 一

わが国において、明治維新以来のわが国の近代化の歴史的構造 — 基本的には資本制の発展 — を問題にする研究は、それがいかなる側面からなされるのであれ、中国のそれと比較しながら進められる場合が多い。しかし、結論的にいつて、こうした試みは、まだ十分な成果を生みだしているとはいえない。(戦前戦後を通じての一連の幕末・維新史研究参照)。

一般にこれまでの研究では、大ざつばにいつて、両国の国内・国外のそれぞれにおける政治・経済・社会・文化の個々の側面の歴史的状況や、ある程度の現象から抽出された大ざつばな「型」の差異を検討するという方法がとられている。もちろん、そこに明かにされた個々の歴史的状況や、「型」の差異の示す理論的事実そのものにおいては、その限りで一定の真実が明かにされてきているといえよう。しかし、それは、少くとも今日までを見通すような方向で近代化の道を構造的に明かにするには、まだきわめて力弱いものといわなければならない。少くなくとも、ある時点において(19世紀後半)、両国が、独立と半独立の差を示したのは何故か?といったような、時間的にも空間的にもきわめて限定された範囲内で問題が提起され、そのいわば便宜的な説明が指向されている限り、諸条件や型の差異は、形式的に分類された国内・国外の両側面において、たゞ併列的に論ぜられてしまう結果とならざるを得ない。

そこで、いずれも後進国であることには変りのない両国の近代化 — 資本制発展 — の差あるいは共通の地盤といったものを構造的に明かにするためには、これまでの研究の欠陥の上立つて、少くとも二つの問題追求の視点を考えることができると思われる。

第一の視点は、両国の中世的構造の差異が、具体的にどのように、資本制の発展の差異を規定してきたか?ということである。これは、両国における個々の資本制の形態(たとえば産業の経営形態)を抽出して比較するならば、同じ後進国という条件のもとで、質(段階)・量(副次的な要素)何れの差異と認めてよいかを判定することに非常な困難を覚える状況が示されてあるという事情に鑑みて考えられた視点である。

第二の視点は、世界市場の形成とその発展のそれぞれの時点で、両国が、客観的に、どのような点で共通した、あるいはどのような点で相異した地位と役割を演じてきたのか?さらにはまたそのような国際的な地位の結果として、それぞれの時点でどのような資本制の構造変化が、両国の国内ですすめられてきたのか?という視点である。これは、たとえば、イギリス=産業資本主

義ないし帝国主義、中国＝半封建制、日本＝絶対主義といった諸規定を、諸事象の解釈のために観念的に、不当に乱用して、結局、前述のような欠陥を克服することが出来ない状態から脱け出さねばならないという考え方から立てた視点である。

このような視点は、最終的には、より有機的・統一的な論理で結び合わされねばならないし、そうした論理こそが、両国の近代化 — 資本制発展 — の構造論理となり得るものであろう。これまで掲げて来た労働運動の史的研究も、また、このような視点を追求することなくしては、歴史発展の法則性を追求する目的に役立たしめ得ないものとなる。

しかし、この機関の研究としては、第一の視点は、具体的、積極的にとり上げることをせず、第二の視点の詳細な研究を主たる内容としたい。前年度までに、19世紀30 — 95年の間の、先進資本主義国イギリスを中心とする世界市場形成と中国および日本の役割、それが国内に及ぼした影響などにつき、棉布市場を中心に考察した。(近代中国研究第二輯掲載予定)

本年度以降は、まず、主として、わが国の官衙・会社に死蔵された中国関係文書を蒐集整理 — (19世紀末から20世紀30年代くらいまでを目標として)、わが国の対中国经济進出をめぐる諸様相を明かにし、わが国と中国との具体的な関連の中で、両国の近代化 — 資本制発展 — の構造的差異をみいだしてゆきたい。

初年度は、日清戦争から辛亥革命を念頭においている。

### 近代中国における通貨金融問題

佐々木正哉

近代資本主義成立の前提として近代的な通貨金融制度の確立は不可欠の要件である。従つて近代中国における通貨金融制度の研究は近代資本主義成立の基盤についての探究であると共に、広く中国の近代化の問題にも関連する。

周知の如く、19世紀の初頭以後、中国の幣制は甚だしく混乱したが、一方においては票号、錢莊、銀号等の旧式金融機関の勢力が著しく強大となつた。この二つの現象は決して無関係のものではなく、旧式金融機関の発達に幣制の混乱に依るものである。そして旧式金融機関は一度その経済上における勢力を確立するや、自らの活動と繁栄の基盤を温存するために必然的に保守的となり、現状維持に懸命とならざるを得ないのは当然の理である。従つて近代中国における通貨金融問題を考える場合に、この勢力はあらゆる点において無視することの出来ない存在である。

所で中国の幣制統一 — 幣制近代化の努力は19世紀末以後漸く顕著になつて来たとは云え、

容易にその実現を見るに至らなかつた。これを簡単に政治力の問題に還元してしまうことなく、あくまでも各種の経済勢力の利害関係を中心として分析して見ようとするのが私の計画である。そこで(1)一体幣制改革の意見はどういう事情のもとに、どういふ人々によつて最も積極的に主張されたか。(2)これに対して抵抗したのはどういふ勢力であつたか。(3)諸外国は中国の幣制問題に対してどういふ態度をとり、如何なる役割を果たしたか、等の問題を整理しながら、近代中国における通貨金融制度の推移を考えて見たい。

### 初期李大釗の思想について

#### — 民国初期のインテリ群像と欧米近代思想 —

里井彦七郎

その名が喧伝されながら、李大釗の研究は非常に遅れている。とくに、マルキストになるまでの、つまり、初期李大釗に関しては、殆んど研究されていないし、たまたま論及されても、その思想の進歩的側面だけが強調されるという欠陥がある。(拙稿「李大釗の出発」— 史林40の3参照) 本研究は右の盲点を是正し、辛亥革命—五・四運動の間の中国インテリ群像が、民主主義体制と思想の確立をめざしてどう模索したか、とくに、欧米近代思想をどのように摂取しようとしたかを追究し、その過程での、初期李大釗の思想的発展と、それが果たした歴史的役割とを、ほぼ次の三期に亘つて考察する。

第1期……言治期 1911~14年(23~26才)

第2期……甲寅(月刊)期 1914~16年(26~28才)

第3期……調和論期 1916~18年(28~30才)

第1期に就ては前掲拙稿で素描したので、本研究では一応除外される。第2期は、第一次世界大戦の勃発・日本の山東侵攻などが示す民族的危機深化の中で、袁世凱一派の帝制運動が強行され、民主主義的なインテリ層の諸活動が殆んど封ざられた、いわば大きい反動期に当る。このとき李大釗は日本に留学、袁系「言治」集団を去つて、「甲寅月刊」集団に移行し、同時に「新青年」にも投稿、「甲寅月刊」の主宰者であり、政学系の理論的指導者でもあつた章士釗に師事しつゝ、中国社会の民主的発展の方途について、きわめてユニークな哲学的思想を展開した。従つて本期の彼の思想的発展は、「甲寅月刊」「新青年」所属のインテリ群像との関連をぬきにしては考えられないし、ほぼ同時期の「雅言」(康率群主宰)集団や、「庸言報」(梁啓超主宰)集団の思想体系とも比較考察する必要がある。亦、「黄遠生遺著」や「東方雑誌」「民国經世文篇」

など未開拓史料も少くない。

第3期は、日本にバックアップされた段祺瑞一派の支配の下で、五・四が直接的に準備された時期に当る。李大釗は17年、北京大学教授に就任、「晨报」「甲寅日刊」「太平洋」「新青年」などに拠つたインテリ群像とともに、その思想的模索を続行した。この期の彼の主な著作は「甲寅日刊」に発表され、筆者未見であるが、「太平洋」「新青年」所載の彼の著作を通じて知られることは、章士釗、李劍農ら欧米派、大陸派に共通の調和論的思想を濃厚にはらみつゝ他方、それを克服しようと努力し、同時に梁啓超的な思想——「庸言報」や「大中華雑誌」など参照——と対決、マルキシズム摂取への準備をしたと考えられる。

これまで、五・四を準備したインテリの思想的活動は、殆んど「新青年」集団に限つて考察されて来たが、当時の中国のインテリはもつと多様、複雑な諸集団を形成、欧米近代思想を摂取しつゝ相互に思想斗争を行い、民主主義の建設をめざしたと思われる。李大釗もその群像の一人であり、その旧ブルジョア民主主義時代の修練と勉学の過程をぬきにして、たゞちにマルキスト李大釗を設定することは、一面的な公式主義におち入るのではあるまいか。

#### 阿片戦争と郷勇

鈴木中正

清末清朝政権の崩壊過程に於いて官軍戦力の絶対的相対的弱化和、これに対応する地方義勇軍の防衛戦力としての比重の増大、換言すれば清朝防備力の主体の漸次的転換は次の如き諸点で極めて重要な意義をもつと考えられる。即ちこの転換に対応して地方義勇軍を背景にもつ華人官僚の中央及び地方の政治機構に於いて占める対満人比重の増大、地方義勇軍の進出に伴う防衛の遠心的、地方分離的傾向の増大、被支配層社会に於ける反官軍的空氣が醸し出す反政權的空氣の増大（清朝政權威信の失墜）、それに対応する内乱の増大、などがその主なものである。このような軍事力の転換は太平天国鎮圧の際最も顕著にみられたが、しかしそれはその際突発的に起つたのでなく、19世紀初め嘉慶朝の白蓮教乱の際に郷勇は既に「必要条件」として、反乱鎮圧のために重要な役割を演じたので、太平天国の際の郷勇はその延長とみることができる。

しかし郷勇はこの二つの大きな内乱の中間に起つた阿片戦争及びそれにつゞく英仏連合戦争の際にも重要な役割を果すべきものとして——その實際的効果は別として——招募利用せられた。本研究はこの間の事情を、以下の諸点を考慮に置いて攻究せんとするものである。即ちこの際の戦争の対象は内乱ではなく、近代的装備をもつ西洋植民勢力でありながら、展開されたのは特異

な植民地戦争形態であつたこと、換言すれば清朝政権の打倒そのものを狙うに非ず、又広大な地域の長期占領を意図するものでもなく、威嚇的沿岸ストームに外ならなかつたことと、財政上の要請とが郷勇の長期に亘る維持訓練を著しく困難ならしめたこと。次に清国に於ける銃後の社会態勢即ち所謂土匪漢奸の如き反政權的反社会的分子に対し不断の顧慮を払わねばならず、郷勇対策はある意味でこの種の対内政策としての意味をもつたこと。以上の前提条件を考慮にいれつつ、清朝がいかなる政策をもつて郷勇を招募利用せんとしたか、又当該郷勇の本質をも解明する。即ち本研究により、清朝の対西洋屈服が通常言われる如き武器の優劣という技術面にのみ起因するに非ず、国民的規模の防衛態勢を編成しえなかつたこと、それが可能なる為には餘りにも幅広いギャップが支配権力と被支配層の間に存したことを明らかにし、かかる政治的態勢が、被支配層の中から生まれ完全にそれを把握しうる新しい政權に席をゆずらねばならなかつた必然性を探求する。

## 清 末 民 初 の 修 譜 と 宗 族

多 賀 秋 五 郎

### 1. 中国譜の基礎調査

中国譜とは、中国の宗族間で作られた系譜のことで、宗譜、族譜、家譜、譜などと呼ばれているが、これまで、その調査に当つてきたので、いちおうその経過について報告し、ついで、今後の研究問題について述べたい。日本の各図書館・研究所において、譜の部に入れてあるものは、1502部あるが、そのうちには、(1)譜として適当でないもの、(2)現物の見当らないもの、(3)譜の部以外にあるもの、(4)番号が同一で内容の異なるもの、(5)内容が同一であるのに番号の異なるものなどがあり、若干増減が見られる。これを整理すると、1428部となり、さらに、各図書館間の重複を整理すると1236部となる。

#### I 中国譜目録

これは、1236部の各譜につき、宗族名、書名、巻数、冊数、縦横、印刷、年代、編者、蔵所別名(巻頭、目首、巻尾、版心、扉、見返、外題)を調査して作製した目録である。

#### II 書名索引

譜は一部でも種々の書名があるので、どの名称でも目録より捜し求められるようにと考えてつくつた索引である。

### III 地域別目録

現存する譜が編集された当時、宗族の居住していた地点を地域的に分類したもので、これを省別に整理すると、つぎのようである。

江蘇	431	浙江	369	安徽	137	広東	42	山東	41	河北	30
河西	30	湖南	26	山西	18	湖北	16	福建	15	奉天	12
河南	11	広西	5	四川	5	貴州	5	雲南	3	吉林	2
黒龍江	2	陝西	1	察哈爾	1	蒙古	1	不明	32		

これを蔵所別にみると、江蘇・浙江・安徽のものはどこも多いが、東洋文化研究所のものは広東・福建のものが多く、東洋文庫のものは山東・河北が多く、国会図書館、ことに東亜研究所旧蔵のものは河北が多い。

### IV 時代別目録

譜を古いものより時代的に配列したもので、これを年号別に整理すると、つぎのような数字が得られる。

(元代)	1	(明代)	12	順治	3	康熙	18	雍正	6	乾隆	61
嘉慶	65	道光	114	咸豊	33	同治	98	光緒	427	宣統	21
民国	314										

### V 蔵所別目録

各蔵所の重複を整理した目録で、各蔵所の数はつぎのようである。

東洋文庫	780	国会図書館	379	東洋文化研究所	236	内閣文庫	3
教育大	6	京大	4				

### 2 問題の発見

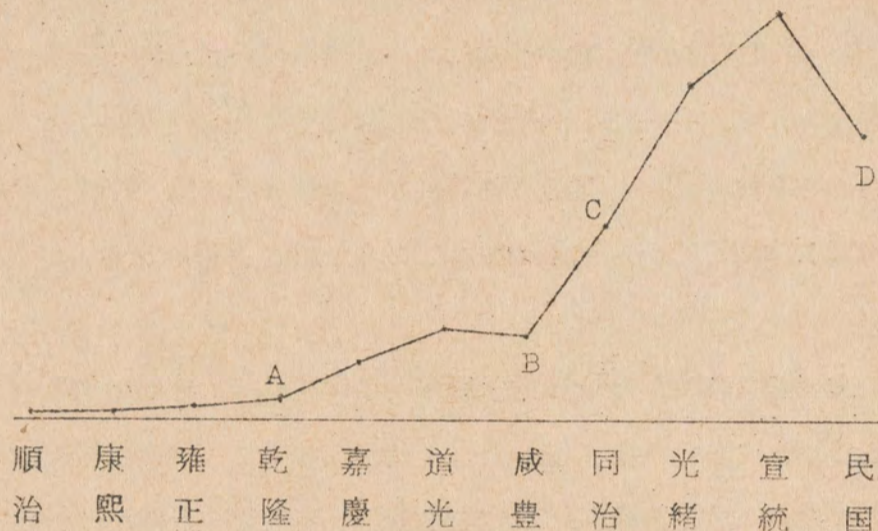
譜の歴史的過程を考察する場合、「発達」とか、「衰退」とかを、何を基準として論じたらよいかといえば、前の基礎的調査より、(1)数字的に、(2)質的に、(3)地域的にどうなってきたかということが、いちおうの目やすとなる。

#### I 数字的な展開

順治	2	乾隆	10	咸豊	33	宣統	150	康熙	3	嘉慶	26
同治	75	民国	112	雍正	5	道光	36	光緒	126		

上表は各年代の10年平均数である。次表は、年代の新しいものほど多いという資料的制約もあるが、(A)の緩慢な上昇線では、国家の政策と宗族、宗族の経済力と文化、(B)点の下降では、太平天国軍と宗族、(C)の急激な上昇線では、宗族結合の一時的昂揚、印刷の発達と修譜の流行、外

国勢力への反動と民族主義、(D)の下降では社会の変化などがいちおう予想されるが、その原因について実証的に追及して行きたい。



### II 分量的な展開

卷数を整理すると、50巻以上のものは、同治・咸豊・雍正に各一部ずつあるほかすべて光緒以後のものである。30巻以上のものは、乾隆に3部・康熙に1部あるほかすべて道光以後のものである。10巻以上のものは、明代に2部あるほかすべて康熙以後のものである。つまり、時代が降るほど分量が多い。もつとも、巻数では、不分巻のものが多く、また百葉一卷のものもあれば一葉一卷のものもある。それで、これを補うため、冊数についても調査してみたが、結果はやはり、時代が降るほど多いものがみられる。この分量の増加ということは、宗人の増加にもよるが、記載事項がくわしくなり、資料も多く取められ、通譜合譜も盛んになった結果である。それで、ここでは、譜の内容がどのように発達してきたかということが問題となつて来る。

### III 地域的な拡大

古譜(唐代以前の譜)は、華中にもみられるが、華北において盛んであつたが、近譜(宋代以後の譜)は、華北にもみられるが、華中、華南においてさかんである。近譜は古譜の流れを汲むとはいえ、修譜を営む宗族の階層がまったく異り、別個の基盤に発生・発達している。明代の譜で現存するものは、新安及びその周辺に限定されているが、それほど、この地方には、当時、修譜がさかんであつた。そうして、華北に拡ろがり、満州・蒙古・朝鮮に伸びている。また、華南へ拡がつては、海南島や安南に伸び、また、琉球へも来ている。さて、ここに、一点一譜主義で分布図を作製してみたが、それによると、

- (1) 海に面した地域や長江下流の地域、つまり、海港都市や商工業地帯など、経済や文化の進んだ地方に多いことが知られるので、なぜ、こうした地方に発達したかについて研究を進めてみ

たい。

(2) その密集地帯は、江蘇省の鎮江 — 丹陽 — 常州 — 蘇州の線と常熟附近、浙江省の杭州 — 紹興 — 餘姚 — 慈谿 — 寧波、安徽省の桐城附近、新安地方、広東省の広東附近、湖南省の長沙附近、江西省の南昌附近であるがそこには、地域的な特色がみられる。例えば、その体裁印刷、活字などをみても、だいたい、それがどこのものであるかが見当がつくくらいで、内容にいたつてはなおさらである。したがって、従来一口に宗族といってきたものの、その構造や機能などに、地域的な特色がかなり顕著に出ていることが予想される。この点について、研究を進めてみたい。

(3) この分布図にあらわされていない宗族、あるいはその宗族の修譜事情などを知つて、修譜がどの程度に行われたかについて調べてみたい。光緒 33 年にできた「懷甯埭埂方氏宗譜」の序文をみると、「民政初、戸籍未備、学会児童之數、既不可得、而知惟是宗譜之修」とあり、安徽省懷甯附近では、学会児童を知るに、戸籍より宗譜の方が期待されたというから、かなりの密度で行われていたものと思われる。また、浙江省興興県の「菱湖鎮志」（光緒 19 年）巻 22 士族のところをみると、66 氏のうち 27 氏が譜を有している。こうした方法によつて、もつと各地域を調査してみたい。

### 3. 問題の整理

以上述べたような問題について、今後研究を進めて行きたいのであるか、それらによつて、宗族の消長を明確にしてみたい。譜の発達と、宗族の結合とが平行するものであるか、それとも、平行しなくて、宗族結合はすでに衰退期に入っているのに、修譜のみが別個に発達したものであるかは、軽々しく論断できないけれども、最近、私は両者が平行するしないよりも、宗族結合の主体が修譜にある宗族すらいくつかの例を知るにいたつた。宗族の結合が、祖先の祭祀を中心とするというものの、その祭祀に加わる資格を決定するものは譜である。つまり、譜に記載されるということが、宗人として認められることである。それで、実質的に、譜は宗族結合の重要な要素といえるから、譜の発達と衰退を追及することによつて、個々の宗族の消長を明かになし得ると思われる。この個々の宗族の追及より、中国社会全体の宗族の動向を推知しようとすることには抵抗も少くないが、できるだけ努力をしてみたい。

## 近代中国における労働問題の研究

田中正俊



## 「張之洞」研究

中山 八郎

清末の変革の一斑を理解するために、代表的官僚の一人である此の人物を中心として研究してみたい。すなわち広く当時の一般情勢を背景とし、此の人物を、

- 1 人物経歴と学問思想
- 2 政治・軍事上の見解と行動
- 3 開辦実業のための施策

の諸項に亘つて、その本末全体について考察し、出来るだけ客観公平な批判をも考えてみたい。従来利用されている資料ばかりでなく、当時の譴責小説などからも資料を渉獵してみるつもりである。

## 五四文化革命について

野村 浩一

五四文化革命についての本格的な研究は、未だ必ずしも十分に行われているとは言い難い。従来、わが国においても、神谷氏の諸業績（「現代支那思想研究」「現代支那思想史」「現代支那思想の諸問題」）をはじめとして、最近では福井康順氏の「現代中国思想」等の先駆的労作が存在するとはいえ、いずれもなお多分に、紹介的色彩が濃厚であつて、五四革命の思想史的意義の解明や、その思想的諸機能の分析という点については、今後に多大の課題を残していると思われる。

いうまでもなく、毛沢東の「新民主主義論」の指摘以来、五四運動の時期は、中国の近代史から現代史への時代区分上の、最も重要な分岐点となつている。しかも、この時代は、思想が直接に社会的諸運動と結びつくことによつて、そのダイナミックな形態を最も赤裸々に露呈した一時期でもあつた。いわば、ここでは、現実そのものが、思想の有効性の検証器であつたのである。従つて、五四運動の思想の解明に関しては、きわめて多面的な考察を必要とされるであろう。

さし当つて、研究を進める上での、おまかな視点として、次のような問題を設定することができる。

すなわち、(1)五四時代が、近代史から現代史への時代区分のメルクマールとなるとするならばそれは思想史的には、いかに現象しているか。いうまでもなく、西洋的近代的諸理念は、清末以

る、或いはアヘン戦争による開国以来、一 幾多の抵抗を受けつつも 一、圧倒的な勢いで中国に流入しつつあつた。清末の諸々の思想家を貫くメイン・カレントは、中国的世界観と西洋的諸思想の複雑な葛藤であつたといえる。従つて五四における「デモクラシーとサイエンス」の叫びは、中国にようやく浸潤し、沈澱しつつあつた近代的諸理念の結実の象徴であつた。換言すればそれは「近代」という「うねり」が、まさに最高潮に達した時代であつた。だが、この高まりはいわゆる五四の時代が過ぎるや否や、忽ちにして暗転して、新しい思想的胎動をもたらすのである。それは、五四の革新的思想が、その統一戦線の中に李太剣を包みこんでいたという事情、また陳独秀のその後の思想的経歴に最もよく示されている。必竟、五四の時代は、歴史上のあらゆる劃期と同様に、ヤーマスの頭であつた。

従つて、こうした複雑な絡み合いの中に成立する五四の思想を、その前後との歴史的関連の下に、統一的に把握することが必要とされるであろう。

(2) 第二に、西洋的諸思想とは、まさしく「諸」思想であつて、中国に奔入した様々の思想は実に多様な色合いを見せている。イブセン、ミル、カント、ショーペンハウエル、ハックスレイ、デューイ等、百花繚乱というも過言ではない。従つて、それらの思想の各々が、どのような仕方で受入れられたかは、重大な課題となるであろう。ここでは特に日本との対比の上において、中国ではドイツ観念論の移入が微弱であつたと思われること、逆にプラグマティズムが、一 僅かに田中王堂を主として移入された日本に対比して、一 圧倒的な流入を示したようにみえることの諸点が考察の対象になると考えられる。

(3) 五四の時期が劃期的な時代であつたことは、言うまでもない。それは、孔子教打倒において、また「礼法社会」に対する徹底的な攻撃において、すなわち旧中国の伝統の否定においてまさに劃期的であつた。しかしながら、その攻撃の武器として使用された「デモクラシーとサイエンス」は、それに続く時代にあつて、そのまゝの形では、換言すれば、西洋近代的な形では、定着しなかつたように思われる。それは、西洋において常に代議制（リプレゼンテーション）と結びついていた、政治的意味におけるデモクラシーが、中国においてどのような形をとつていたかを考えれば、余りにも明瞭である。だとすると、中国の「近代」、中国の「現代」という言葉の持つ意味が、あらためて問われなければならないであろう。こうした文脈（コンテキスト）において言うならば、五四の時代とは、近代的理念の結実の象徴であると共に、西洋近代的諸思想の破産の宣告でもあり得る。疑いもなく、五四から新中国の成立までの歴史は、西欧とは全く異なるパターンの下に展開したのである。従つて五四運動の思想との関連において、中国における「近代」とは何かということが、常に留意されねばならない。

以上、きわめて巨視的な観点からする研究の方向について述べたが、その分析は、勿論、実証的、且つ微視的でなければならない。具体的には、二つの方向からするアプローチが必要と思われる。すなわち、(1)胡適、陳独秀、吳虞、李大釗等の代表的思想家を取上げて、その思想の展開経路をフォローし、併せて、それらの思想家間の共通性と差異を抽出すること、(2)「新青年」「新潮」等の雑誌によつて、その時代の知的雰囲気を探り、また「嚮導」等とも比較して、その特色を分析すること。

テーマが甚だ庞大であり、且つ資料的制約も存在するけれども、概略、上述の如き方向と方法によつて、研究を進めたいと考える。

## 北洋軍閥の研究

波多野善大

筆者は、さきに、辛亥革命に至るまでの北洋軍閥の形成される過程について、豫備的な調査をしたことがあつた。目下この豫備的研究を發展させて、一層コンクリートなものにしようと努力しているのであるが、この形成過程を十分に掘下げるためには、辛亥革命後の北洋軍閥についての理解なしには不可能であることを痛感しているのである。このために、辛亥革命後から国民革命に至るまでの北洋軍閥の地盤を掘下げることによつて、辛亥革命前の形成過程の軍閥に対する理解を深め、また、形成過程の軍閥に対する理解をうつして辛亥革命後の軍閥に対する理解を深めるような方法をとりたいと考えている。

中国近代史、とくに民国革命以後の問題については、全然まだ未開拓の研究領域であつて、信夫清三郎、細谷千博諸氏ら一部の人の日本側からする研究はあるにはあるが、全体として、まだ実証的研究がなされていないといつてよい。こういう中であつてどういふ方法で北洋軍閥についての研究を進めていくか、相当な困難があることは勿論である。

筆者は、まず、北洋軍閥について、それを支えていた地盤が何であつたかを明かにしたいのである。それは、おそらく国内的なファクターと国際的なファクターとがあることと思われるが、それが具体的には如何なるものであつたかを実証的に明かにしたい。従来この種の問題については、観念的な演繹的な従つて抽象的な記述が多いから、できるだけ具体的な帰納的な方法をとりたいと念願している。このためには、比較的資料の多い軍閥の一人について、その地盤を掘下げて見ることが、全体の研究に対する第一段階として有益なのではないかと思つている。そしてもし資料が許せば、少くとも 2,3 人の軍閥について、こういう方法がとりたい。目下のところ、そ

の一人として、張作霖をえらびたいと思つている。張作霖では、少し特殊性があり過ぎて、軍閥一般を理解する基礎にするためには不適當かもしれないが、日本との関係が深かつたから、新聞雑誌をはじめとして、日本側の残している材料が多く利用できると思はれるからである。

## 清国外政機構の変動

### — 総理衙門の設立を中心として —

坂野正高

不斷に流動しゆく政治的状况の中で、従つて、政治諸勢力の不斷に変動しゆく力関係の中で、内政と外政とが相互に規定し合う。かゝる次元において、機構がどのように動かされ、それと相表裏して政策がどのように形成されてゆくかという問題の一つのケース・スタディーとして、本研究は、アロー戦争の結果として、外国公使の北京公使常駐に対応して1861年に北京に総理衙門が設立されるに至る過程とその諸要因とを再検討する。

就中、次の諸点に注意が払われる。

(1) 諸列強、殊に英国は、何故に、外交使節の北京常駐を求めたのか。この問題には、諸列強の外交当局者が、清国の政治構造をどのように理解していたかという問題が絡む。

(2) 清国当局者、更には士大夫層は、この使節常駐の要求にどのように反応したか。籌辦夷務始末を中心とする清国側資料から、当時の、政策論議がかなり詳しく知られる。又、ブルー・ブックや、戦記類のような西洋側資料からは、窮地に陥つた清国側交渉員の行動様式を知ることができる。

(3) 太平天国に対して寧ろ清朝の方を支持する方向に次第に転回しつつあつた諸外国が、よめいている王朝に致命傷を与えないように、軍事力の行使にどのように手心を加えたか。注目すべきことは、諸外国はまた、軍事的外交的圧力が人気の悪い北京の和平派の不安定な立場を強める効果を生むように留意したことである。この和平派がついには総理衙門の中核となつたのである。

(4) 総理衙門の設立を可能にした国内的な政治的要因は何であつたか。かゝる見地から、太平天国の圧力の下に既に全国的規模で起りつつあつた力関係の変動が問題の背景として検討される。更に、北京における主戦派と和平派の間の力関係がアロー戦争の局面の展回と照応して変動する循環過程が検討される。こゝで注目すべき一つの問題は、当時北京においては皇叔惠親王を首席とする少数の皇族によつて構成される親貴会議ともいふべき機関が事実成立していて和戦の決定

について大きな影響力を揮つたと推定されることである（この問題は清朝政治史上重要な意味を含蓄するように思われる）。

(5) 新設された総理衙門は現実にとどのような機能を果たすことになるか。本研究は、総理衙門の設立のみを扱い、その後の40年間発展の全体を対象とするものではない。併し、このような設間は設立のみを考察する場合にも論理的に前提されよう。英仏連合軍の北京侵入という異常なる事件を直接の原因とする北京における力関係の変動によつて作り出された不安定な新しい均衡——それは、1861年後半期の咸豊帝の死後のターゲターによつて一時安定するに至るが——の中でのみ、いわばこの均衡を機構化したものとして総理衙門の設立は可能となつた。従つて、この均衡がやがて再び変動すれば、総理衙門そのものの現実にも営む機能も亦、変動せざるをえなかつたのである。

以上の諸点を主たる問題点として、序章は総理衙門以前の外政機構を概観し、第一章は、総理衙門設立の外的要因として外国側の使節首都常駐の要求とこれに対する清国側の反応、及び、外国側の清朝支持政策とを検討する。第二章においては、設立の内的要因として、国内の政治勢力の力関係の変動が考察される。右にあげた「親貴会議」の存在の推定はこの章において詳細になされる。第三章は、1858年天津条約調印以後、外圧の下に間もなく起り始めた清国外政機構の変動を、第二章における分析を背景にして、微視的に跡づける。1859年の欽差大臣の上海改駐、同年の米国公使ウォードの北京入京、1858年末から1860年初夏に至るまでの露国使節の北京交渉に絡む露清交渉機構の変動、などがこゝで検討される。第四章は、1860年秋の北京交渉から1861年初頭の総理衙門設立までを扱い、北京交渉の過程を通じて、恭親王を中心とする新しい外政機構が、迂余曲折を経ながら次第に事実上形成されていつたことを明かにする。第四章は、更に、設立当初の総理衙門の機構的特質を検討し、最後に、総理衙門のその後の動きについて若干の展望的考察を行う。

この総理衙門の設立に関する私の研究は、1951年に始められ、東洋文庫及び東京大学にある資料を骨格とし、米国において利用しえた資料を補い、1856年末を以て一たん完結をみた。序章から第三章までは、なお未定稿である露清交渉に関する部分を除いて、既に国際法外交雑誌に二個の論文として発表された。又、第四章に当る部分は、1955～56年度研究報告として本委員会に提出された。併しながらその後、私はロンドン、及びパリにおいて未公刊の外交文書を閲覧することをえ、又、先には利用しえなかつた公刊資料や新しい研究文献にも接することができて先の研究成果にかなりの補正を行う余地を生じた。又、既に発表済みの部分についても、史実の考証や解釈、さらには論考の構成について再検討を行うべき点の少くないことが反省された。よ

つて、この1957~59年度においては、一度完結させたこの研究を、全体に亘つて再検討し、全篇を書直したい。今回は、英文をもつて執筆する予定である。

### 民国初年の教育制度

牧野 巽

### 中国工業化の過程における外国とくに日本の役割

村松 祐次

### 中国伝道に対するイギリスの政策

矢沢 利彦

キリスト教における聖職者は元来インターナショナルな存在であるべきものであるが、近世国家の成立によつてこれはもろくもくずされてしまった。国家は自国の国籍を有する、あるいは自国が保護を加えている宣教師が、自国の国策と相反する方向に行動することを望まなかつたし、宣教師の善意による行動から生じた成果を巧みに自国の政策のなかに繰込むことを忘れなかつたからである。

16世紀以来中国のキリスト教化に関係の深かつたヨーロッパ諸国のうちで、カトリック系のイスパニア、ポルトガル、フランス諸国の対華布教政策については、わたしはこれまで少く研究を行い、その輪郭をつかめるようになった。しかしプロテスタント系のイギリス、アメリカ両国の伝導政策については全然手をつけていないので、今次の研究ではまずイギリスの場合を課題として取上げ、列国と中国教化の問題を総合的に考察するよすがとしたい。

中国教化に対するイギリスの政策は、フランスのそれに較べるとはるかに消極的であるかに見える。本国政府、政党、現地外交官、居留民たちは少なくとも19世紀にあつては宣教師の伝導活動に対して積極的に支持することよりも抑止することに熱心であつたかのような印象を受ける。これはなにから生じたものであるか、またその実体はどういうものであつたかをまず調べて見たい。いろいろな予想が立てられないことはないが、いまは白紙で臨むことにする。

つぎにイギリスの外交当局、現地外交官は中国在住の宣教師の行動を快く思つていなかったようであるが、宣教師の生命財産にひとたび危害が加えられた場合は決してこれを放置しなかつた。事態收拾のためにどういう処置がとられたかを個々の事件に即して調べて見たい。この点では必



ずしも消極的ではなかつたのではあるまいか。なおこのようなイギリスの政策は勿論終始一貫したものでなかつたに違いないから、その間に変化が認められるとすれば、その転機をつかみ、かつその理由を明らかにしたい。

この問題を明らかにするために、わたしは1868年の揚州教案と1891年の長江流域教案をまず取上げて見たい。この両事件については幸いにも多数の史料が現存しているうえに、イギリスの政策がかなり明瞭に打出されている点で興味があるからである。

#### 民国初年の地方自治

山根幸夫

#### 近代東アジアの研究に使用される歴史的な概念の整理

山本達郎

近年アジア近代史の研究は急速に進歩しつつあるが、各研究者の使用している用語が頗る不統一であり、恣意的であつて、その為多くの混乱をひき起し、学問進歩のための協同の論議を妨げている場合が少なくない。各種の専門分野に於て同じ言葉が異つた内容で用いられる場合があり各研究者それぞれの学問的・政治的な立場に従つて差違が生じている。学問的な必要から新しい概念を作り出すことはもとより重要な仕事であるが、われわれは先ず東洋近代史の領域に於て現在多くの学者によつて用いられている種々の用語を整理して明確な概念によつて論議を進めなければならない。「近代」「封建」「ナショナリズム」「デスポティズム」「共同体」「植民地」「自由」「平等」「民主主義」「奴隷」其他の用語を問題として、特に研究会の論議を進めるのに必要な諸概念の整理から着手する計画である。西洋の歴史研究で用いられる概念をそのまま東洋の歴史にあてはめることには無理が多いので、東洋の歴史研究に適した概念を立てる当面の目的を以て研究を行い出来るだけ普遍的に世界史の問題を取扱うための概念の整理に近附くことを努めたい。具体的な事例としてはシナとインドシナを問題とする。

#### 近代中国に於ける西洋思想の受容形態

山本澄子

中国の近代化という問題を思想史の立場から考える場合、西洋近代思想が中国でどのように取

り入れられ、どこまで浸透したか、ということを一応考えてみる必要があると思う。東洋には東洋独自の近代化の道があり、西洋化と近代化とが同一でないことは言うまでもないが、しかし中国の場合、その近代化の過程に於ける西洋文化の役割の大きいことは否定できないからである。また物質文化と異つて思想の場合は、外来思想がそのまゝの形で異つた伝統文化の中に取り入れられるということは殆んどなく、取り入れる側の文化によつて外来思想の取り入れ方にもそれぞれ特徴が見られる。

このような見地から、今のところ次の二つの題目を考えている。一つは、これまでの研究と同じく中国のキリスト教（とくにプロテスタント）について調べてみたいと思う。即ち外来思想であるキリスト教が、中国の伝統文化の中にどのように入り込んでゆくか、キリスト教の中の何が特に重要視され、何がゆがめられたか、キリスト教が中国の現実の問題に、社会的、経済的のみならず精神的にも、如何なる役割を果たしたか、等々の問題を探つてみたいと思う。また一つにはキリスト教に限らず西洋近代思想が近代中国にどのように取り入れられたか、特に自由・平等・人権・解放等の思想が、五四時代の思想家にどのように解釈されていたかについて考えてみようと思う。

#### 満洲近代史の研究

和田 清

日本人が満洲に発展した歴史は次ぎの四期に分つことが出来る。第一は日露戦争の後（1905）から有名な21箇条交渉の時（1915）までである。この間に日本は満鉄の経営に専念したが、支那もまた満洲の機構を改革し、東三省に総督巡撫を置いてその面目を一新した。その間米国のハリマンの満鉄買収問題、英国の新民屯法庫門鉄道の敷設問題、米国の錦璣鉄道問題、満洲鉄道中立問題等が起り、日本はロシアと提携してこれらの難問を排除したが、十分な権利がなく、頗る困難な時代であつた。第二は大正4年から同11年ワシントン会議（1922）までの期間である。この時欧米列強は第一次大戦に没頭していたから、日本は21箇条の締結によつて、旅順大連の租借期間、満鉄の所有期間等をそれぞれ99年に延長することに成功し、その他満蒙に於ける土地商租権なども確立して、漸く自由の手腕を振うことを得た。1917年にはロシアに革命が起つて、帝政政府が潰滅し、革命政府もその羽翼がまだ整わなかつたので、日本は列国と共同してシベリア出兵なども行つた。第三の時期はワシントン会議から後、満洲事変の起る時（1931）までである。ワシントン会議では支那の権利の認められると共に、日本の過度の膨張は抑制せられ、



日英同盟は廃棄され、石井ランシング協定も、否認されたので、日本は既得の權益を擁護するのに精一杯であつた。一方支那では国内の紛乱に係らず、満洲は日本やロシアの力で治安が維持されたので、人口は増え、産業は起り、頗る繁榮に赴いた。なほ一般に民族主義が大いに起つたので、条約は改正され、租界は続々回収された。勢の赴くところ満鉄の併行線が作られ、旅大回収の声さえ起つた。他方日本には満洲を国家存在の生命線とし、一部にはこの地を以つて支那本部と切り離し独立せしめる希望もあつたのであるから、こゝに満洲事変が起つたのである。その間には張作霖が殺され、張学良とロシアとの間に戦争さえも起つたのである。第四は満洲事変の勃発より満洲国の終焉(1945)までの一時期である。この間には満洲国の経営は最も熱狂的に行われ、鉄道の敷かれたことも、電信電話の普及したことも、空前絶後の速度であつた。国都新京の建設は民国の南京の建設と共に、その壮大を競つたが、その中支那事変が起り、大東亞戦争に発展して、南京も潰滅し、新京もやがて潰滅したのである。その間にはソヴェトとの間に乾岔子事件、張鼓峯事件、ノモンハン事件も起つたのである。王道楽土、五族協和は軍のかけ声だけであつたが、多くの民族が混合するところ、一時は色々面白い現象も現われたのである。

X  
 << 定例研究会 >>

研究報告の内容は、ほとんど他の紀要、雑誌や「近代中国研究」第一輯に発表されたか、今後発表されるものですから、ここにはその梗概を記すことを省略します。

発表者	題名	年月日
市古宙三	最近日本における近代中国の研究	1957. 4. 13
小山正明	明末清初の大土地所有 — とくに江南デルタ地帯を中心にして —	4. 27
野村浩一	中国近代思想に関する若干の問題 — 清末公羊学派を中心として —	5. 18
村松祐次	中国史学会「戊戌変法」を読みて	6. 1
矢沢利彦	長江流域教案の一考察	6. 15
山本澄子	中国のキリスト教会自立運動について	6. 29

佐々木 正 哉	管口商人の研究	7.13
市 古 宙 三	湖南独立の事情	
	— 特に焦達峯について —	9.21
山 本 達 郎	ミュンヘンの東方学会議に出席して	10.26
衛 藤 濬 吉	中共中央と毛沢東	11.30
多 賀 秋五郎	華北の譜について	12.14
坂 野 正 高	外国における中国研究	1.25
山 本 達 郎	タイから帰つて	2. 8
市 古 宙 三	批評と紹介	2.22

Mary C. Wright; The Last Stand of  
Chinese Conservatism.

John K. Fairbank; Chinese Thought  
and Institutions.

呉鉄城 ; 40年来中国与我

周善培 ; 辛亥四川争路親歴記

「<< 研究員研究活動 — 1957年 >>」

< 著 作 >

和 田 清 明史食貨志訳注  
東洋文庫 1957

< 論 文 >

衛 藤 濬 吉 対中国戦争終結工作  
「太平洋戦争終結論」所収 1958.2 発行予定

小野川 秀 美 譚嗣同の変革論 — その形成過程 — 東方学報 27

- 小山 正明 明末清初の大土地所有(1)  
 — とくに江南デルタ地帯を中心にして — 史学雑誌 66-12
- 佐伯 有一 わが国明清時代研究における商品生産評価をめぐって  
 「中国史の時代区分」所収 1957年5月  
 明末董氏の変 東洋史研究 15-4 1957年6月
- 里井 彦七郎 李大釗の出發 史林 40-3
- 鈴木 中正 清代の満洲人羣について 愛知大学文学論叢 創立10周年特輯号  
 チベット探検家ウィリアム・ムーアクロットと内陸アジア貿易  
 史学雑誌 66-9
- セーロン古文化とその経済的基礎 国外政治事情 23
- 多賀 秋五郎 中華人民共和国の歴史教育 歴史教育 5-9
- 田中正 俊 中国歴史学界における「資本主義の萌芽」研究  
 「中国史の時代区分」所収 1957.5 発行
- 中山 八郎 明の嘉靖朝の大札問題の発端 人文研究 8-9
- 野村 浩一 孫文の大アジア主義と大陸浪人 思想 1957-6  
 清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義(1)  
 国家学会雑誌 71-7
- 波多野 善大 清末における鉄道国有政策の背景  
 名古屋大学文学部研究論集 史学 6
- 波多野 善大 日露戦争後における国際関係の動因  
 — 日米関係を中心とする —  
 「国際政治」日本外交史特輯号 1957.10
- 坂野 正高 天津条約(1858年)調印後における清国外政機構の動揺  
 — 欽差大臣の上海移駐から米国公使ウオードの入京まで —  
 国際法外交雑誌 55-6, 56-1
- 矢沢 利彦 徐光啓 歴史教育 5-10
- 和田 清 日本に及ぼせる仏教儒教の影響 「アジア文化の再認識」所収  
 支那の誕生祝について 「滝川博士記念論集」所収  
 革書偽作考 「神田博士記念論集」所収  
 日本建国の年代 歴史教育



< 研究発表 >

衛藤 濤吉 江西蘇維埃政權 アジア政経学会秋季大会 1957.11.15

小野川 秀美 譚嗣同と唐才常 東洋史談話会大会 1957.11.3

佐伯 有一 明末の官紳地主について 東大東洋文化研究所 1957.7

里井 彦七郎 陳天華の思想 新史学研究会 1957.5

重田 徳 「地丁併徴」に関する二・三の問題点

東大東洋文化研究所 1957.5.31

鈴木 中正 嘉道間の財政と官僚の性格

史学研究会東洋史談話会 1957.11.1

多賀 秋五郎 宗族と教育 日本教育学会 1957.5.2

中国教育史資料としての宗譜 教育史学会 1957.9.22

貞観氏族志偽托説について 大塚史学会 1957.11.17

中国の歴史教育について 中国教育史学会 1957.11.2

坂野 正高 総理衙門の起源

Association for Asian Studies. 1957.4.3

〔 << 研究員動静 >> 〕

○ 村松祐次氏はアメリカの研究機関を視察するため、1957年8月アメリカに向い、約3ヶ月スタンフォード大学に滞在、同年12月、シアトルを経てケンブリッジに移り、その後ひきつづきハーヴァード大学で研究をしています。

○ 山本達郎氏は、1957年8月ヨーロッパにむかい、ミュンヘンの国際東方学者会議、マールブルグの青年シナ学者会議に出席、帰途はパリにて資料を搜集して、同年10月帰朝しました。また1958年2月末から3月初にかけて約10日間、タイの首都バンコックに滞在、「東南アジアの伝統文化と技術の発達」に関する会議に出席しました。

○ 佐々木正哉氏はアメリカおよびヨーロッパにおいて、研究機関を訪れ、資料を搜集するため、1957年11月アメリカにむかい、爾来ずつとワシントンに滞在し、国立古文書館、議院図

書館で資料をあつめています。

○ 坂野正高氏は、1956年のはじめアメリカにわたり、それから約1年半、スタンフォード大学、ハーヴァード大学で研究に従事していましたが、1958年8月アメリカを去つてヨーロッパにむかい、マールブルグの青年シナ学会議に出席、その後、ドイツ、オランダ、イギリス、フランスの研究機関を訪れ、資料を集めました。そして帰路は、インド、ビルマ、香港、台湾などアジアの諸地域を訪れて、これらの諸地域における中国史研究の状態を視察し、12月30日無事羽田に帰着いたしました。

○ 佐伯有一氏は、1957年7月、東京都立大学の助教授になりました。

### X << 近代中国研究の創刊 >>

わたくしたち第一期の研究成果を発表するために、「近代中国研究」を発行することにし、その第一輯を本年2月に刊行しました。その内容は次の通りです。(価額 350円)

総理衙門の設立過程	坂野正高
長江流域教案の一考察	矢沢利彦
下関条約第六条第四項の成立した背景について	波多野善大
営口商人の研究	佐々木正哉
中国のキリスト教会自立運動について	山本澄子

### [ << 目録・索引の編修状況 >> ]

わたくしたち近代中国研究者に必要な文献は、日本にもずいぶんたくさんあると思うのですがそれらの文献を所蔵する図書館や研究所で、印刷した図書目録を出していなかつたり、出しても不備だつたり、龍大で検索に不便だつたりするのが実情です。そのために、一つの資料を探し求めて足を棒にしたり、眼と鼻のさきの研究機関にありながらそれを知らずにわざわざ外国でマイクロ・フィルムにおさめて来たり、こういつた無駄なことを、わたくしたちはしばしばしてい



るのです。こういう無駄を省くためには、どうしても総合目録が必要ではないでしょうか。わたくしたちはそう考えまして、わたくしたちの研究をすすめる便宜のために、中国文新聞雑誌総合目録と近代中国研究中国文文献総合目録を作製しはじめました。その進行状況は次の通りです。

○ 中国文新聞雑誌総合目録

下記図書館・研究機関所蔵の中国文新聞雑誌の目録カードを作製し、これを電話番号帳式に排列して、委員会室に備え付けてあります。これをさらに整理し、できるだけ早い機会に印刷に付したいと思つています。なお各機関名の後の括弧内に記してある人は、目録カード作製にご協力いただいた方々です。ここにあつくお礼申しあげます。また括弧内の書名は、それによつて目録カードを作製したものです。

京都大学 (小野川秀美、里井彦七郎)

国立国会図書館上野分館 (帝国図書館新聞雑誌目録 一 昭和 10 年、国立図書館新聞雑誌増加目録 一 昭和 23 年)

中国研究所 (門田昌子)

天理図書館 (逐次刊行書目録昭和 29 年 3 月現在第 2 版 一 1954)

東京大学図書館・文学部 (春名徹・梶村秀樹)

東京大学東洋文化研究所 (重田徳)

国立国会図書館 (亀井慶子)

東洋文庫・近代中国研究委員会

なお全体の整理には、三浦和子が主として当つています。

○ 近代中国研究中国文文献総合目録

これは前途遼遠ですが、いまは委員会の蔵書目録カードに、東洋文庫、お茶の水女子大学歴史研究室蔵書カード目録の中から近代史関係のものを抽出してこれに加え、さらに参考にするために、次の書目からもカードを作製してあわせ、それを書名により電話番号帳式に排列してあります。

大平天国資料目録。近代史資料叢刊の引用書目、参考書目

中国近代出版史料・中国出版史料の一部

Eugene Wu "Leaders of Twentieth-Century China"

Fairbank and Liu "Bibliography of Modern China"

今後は主要図書館の蔵書もこれに加え、さらに著者別、分類カード目録も作るつもりですが、これはなかなか容易なことではありません。それでとりあえず、伝記年譜類、詩文集全集類から順次整理し、簡単な解説をつけた総合目録を編集・刊行したいと思つています。

なお全体の整理には主として山崎妙子があたつています。

○ 伝記索引

わたくしたちが近代中国を研究していて非常に困ることの一つは、何をみたら民国以降の人の伝記がでているかわからないことです。わたくしたちがまず伝記年譜類の総合目録から作りはじめようとするのもそのためですが、実は単行本に関する限り、すでにとってもいい参考書ができています。それはあとで紹介する Eugene Wu; Leaders of Twentieth - Century China です。しかしこれには雑誌や普通の著書に含まれている伝記の類、地志に含まれているものなど、はほとんど載録されていません。それで単行本の伝記年譜総合目録を作るのと併行して、この種の伝記索引も編修していくつもりです。そしてそれには日本人の著作も加えたいのですが、しかしこれはまだほとんど手につけていません。

○ 日本文・欧文文献目録

これはわずかに委員会蔵書のカード目録がそれぞれ二種（書名、著者名）できているにすぎませんが、東洋文庫の蔵書目録をこれにあわせたいと思つています。また満鉄調査所、東亜研究所外務省などの調査書類に関しては、他の主要機関所蔵のものをも含めた総合目録を作りたいと思つています。なお日本文、欧文の目録カードの整理には、中山皎子が主として当つています。

○ 東方雑誌目録

これまでわたくしたちは、次のような目録を発行してきました。

中国文化日本語文献目録（教育・キリスト）	絶版
盛宣懐・袁世凱奏議目録	絶版
李鴻章奏議目録	絶版
左宗棠・張之洞・薛福成・張柬奏議目録	（頒価）190円
経世文編総目録第一分冊	220円
同 第二分冊	440円
同 索引	200円
ブリュー・ブック目録	110円
東方雑誌目録	160円
中国雑誌論説目録	絶版
（万国公報・浙江潮・江蘇・湖北学生界・民報）	
東京大学文学部中国哲学文学研究室所蔵	
近代中国資料目録	絶版

これに対してはいろいろの批判があることと思います。誤記が多いという批判に対しては弁解の余地がありません。しいて申せば、謄写印刷のために校正がむづかしいんですが、それよりもつと根本的な批判があります。ただ巻頭の目次をあわせたようなものは無駄、その本をみればそんなものは簡単にわかるんだから、というのです。この批判もわたくしたちは甘んじてうけなければならぬ点がありましよう。あるいは何等かの形で分類でもされていれば、この批判はもつとゆるくなつたのかも知れませんが、実は分類するというのは大変な仕事、それを専門にやるならとにかく、わたくしたちが研究の便利のために片手間にやるんでは、あの程度がせいぜいです。分類するならば、きつとまだ一冊も刊行されなかつたでしょう。そして、分類した目録は、索引でも完備しない限り、素人にはよくても、専門家にとつては不便、かえつて何の手も加えない目録の方が便利ということも考えられるのではないでしようか。手を加えないのがいいならば、各図書のみ次をみればいいじやないかと反論する方もありましよう。そしてその反論は確かですが、しかし実際に図書を座右に置けないわたくしたちには、実はあの程度の目録でも結構とても役立つのです。

このように思いましたので、批判のあることはしつていましたが、つづけて東方雑誌の目録を出しました。第1年（光緒30年）から第7年（宣統2年）までです。第7年でとどめたのはこれから以後は、本の体裁も編修方針も異り、第7年までほどには中国自体のことが書かれなくなつたからです。

東方雑誌につづけて、時務報、湘学報、清議報、新青年の目録を刊行するつもりです。

○ 日本雑誌所載中国関係論説記事目録

「太陽」、「日本及日本人」その他この種の総合雑誌に掲載されている論説、記事の中には、わたくしたちが史料として使えるものが少くないと思います。それで主要雑誌の論説記事目録を作るつもりです。

もとよりこの種の目録・索引の編修は、わたくしたちの主要な事業ではありません。わたくしたちの研究をすすめる便宜のために作られたもの、いわば副産物にすぎませんので、目録、索引としては、きわめて不備、不完全なものと思いますが、できる限り公刊して、一般の方にも利用していただきたいと思つています。



4) << 内外ニュース >>

〔 京都における中国近代史研究 〕

京都の中国近代史研究者は、これまで、バラバラに個人研究をつづけてきたが、2、3年前から漸く集りを持ち始めた。

一つは、京都大学人文科学研究所東方部の小野川秀美、島田慶次、小野和子の三氏を中心とする思想史研究グループであり、一つは、神戸大学百瀬弘、岩見宏、大阪市立大学北村敬直、京都大学里井彦七郎、北宮条平、小野信爾氏らの社会・経済・政治史グループである。

前者は、これまで清末思想史を体系的に明らかにする事を目的とし、毎週一回会合して、基本的史料の講読を続けて来た。すでに、張之洞「勸学篇」、何啓・胡礼垣「新政真詮」（その中とくに「勸学篇書後」）、蘇輿編「翼教叢編」などを読み、次に葉德輝「覚迷要録」を読もうとしている。これらの中、重要なものは、分担者を定め、訳註を附して、できれば公刊したいと考えている。

後者は、盛宣懷「愚齋存稿」の会読から始め、Kent; Railway Enterprise in China その他の洋書を併せ読み、清末の経済・政治・外交上の諸問題を追究して来たが、昨年より、日中交渉史を解明する必要を感じ、府下の故西原亀三家を訪問、当主より氏の日記、書簡、意見書などの整理、解読の了解を得たので、目下それに重点をおいて、毎週一回の研究会を続けている。これには、名大波多野善大氏も有力メンバーとして参加し、一応今後3年以内に、参加者の個人研究成果を各誌に発表するほか、共同研究として一書にまとめる予定である。

右の二グループのほか、2年半前から、新中国での体系的な研究論文——古代から現代に亘る——を、紹介、批評、討議し合う「新史学研究会」ができ、上記二グループの参加人員も、それぞれ個人の資格で参加してきたが、さらに、昨年より、二グループがそれぞれ独自の研究会をつづける傍ら、何らかの形で一つに統合したいという気運が昂まつて来た。そこで、上記各メンバーのほか、愛知大学内藤戊申、大阪学芸大学北山康夫氏らの参加も得て、新しい研究会（仮称「中国近代史研究会」）を設け、これまた、週一日、定期的に会合、「中国近代思想史資料簡簡」を会読し、目下、「民報」の精密な講読を続行している。（里井彦七郎）

## 中国研究所の研究会

孫文研究会 孫文について語られることは多いが、孫文のものがどれだけ読まれているかというところ極めてうたがわしい。翻訳にしても、戦前の第一公論社版は誤訳だらけであり、三民主義の完訳は昨年岩波文庫になつた安藤訳だけである。そういう現状から、われわれは孫文の著作を原文で読み、その共通の基礎の上に新しい孫文研究をすすめたいと考え、孫文研究会を組織した。会は1957年9月に中国研究所の研究会の一つとして発足し、以来毎月第一、第三水曜日の午後3時～5時、中国研究所図書館（国電市カ谷、都電一口坂下車）で会をひらいている。テキストは1956年、北京版の「孫中山選集」で、58年2月末現在、「中国問題の真の解決」までを会読し終つた。その間に報告・紹介を挿入する予定であつたが、現在までのところ、幼方直吉による紹介「孫文の早期の土地改革政策」があつたのみである。会員は安藤彦太郎、六角恒広、宮坂宏（以上早大）、伊東昭雄、高橋義寛（以上一橋大）、篠田雅雄、丸山松幸（以上東大）、野沢豊（教育大）、田畑光永、市村水城（以上東京外語大）、岩村三千夫、野原四郎、幼方直吉、竹内実、新島淳良、池田醇一（以上中国研究所）で、入会は随意である。

機関誌はまだ発行していないが、将来「孫文研究」（仮題）を油印で刊行し、読書会の翻訳と解説、論文等を掲載する予定である。

侯外廬「中国早期啓蒙思想史」読書会 侯外廬の中国思想史研究についてはすでに定評あるもので、戦中にかかれた二名著「中国思想通史」「近代中国思想学説史」はあいついでその改訂版が人民共和国になつてからでた。中国研究所では、後者の改訂版である「中国早期啓蒙思想史」を翻訳出版する計画をたて、1957年春から、一橋大の西順蔵氏をチューターに、読書会をひらいてきた。読書会は毎月第二、第四月曜3～5時に、中国研究所図書館でひらかれている。中国近代思想史に関心ある方々の参加を希望している。現在会員はつぎの10名である。西順蔵、伊東昭雄、近藤邦雄、藤カ崎信人、高田淳、野原四郎、幼方直吉、竹内実、池田醇一、新島淳良。

なお孫文研究会・侯外廬読書会についての問合せは中国研究所まで。（幼方直吉）

## 中国近代思想史研究会

広く、中国の近代思想史に関心を有する者が集つて、定期的に研究会を開いていたが、昨年6月、正式に名前を「中国近代思想史研究会」と定めて、この会が誕生した。連絡機関は、目下都立大学人文学部中文研究室に置かれ、毎月一回（通常、第四金曜の夜）、本郷の学士会館で研究

会が開かれている。会員2名以上の推薦で入会できるが、勿論、傍聴は自由である。メンバーは、竹内 好、野原四郎、西 順蔵、安藤彦太郎はじめ、各大学の大学院学生をも含み、きわめて自由な集りであるが、会名の示す通り、主として思想史に焦点をしばつた報告が行われている。ちなみに、最近の報告を若干挙げれば、次の如くである。野原四郎「中国の政治と学問について」新島淳良「瞿秋白について」、野沢 豊「民国初期の財政問題」、山本秀夫「中国の農業を視察して」、山口一郎「曾國藩の思想」、西 順蔵、貝塚茂樹「毛沢東」の書評、「思想」孫文特輯号の合評会、野村浩一「清末思想史に関する一考察」など。(野村浩一)

#### セント・アントニーズ・カレッジ(オクスフォード)の極東研究所

1955年、オクスフォードの St. Antony's College に「極東研究所」( Center of Far Eastern Studies )が設けられた。St. Antony's College は1950年に創立され、30あるオクスフォードのカレッジの中で最も新しい。ここにはソビエト・ロシア研究のセンターも設けられている。

この極東研究所の新設は、オクスフォードにおける中国研究もしくは極東研究の新機運を物語るものとして注目に価する。以下、筆者が1957年10月に同地を訪れた折の見聞に基いて、同研究所の活動状況を紹介する。

極東研究所は日本・朝鮮・中国・東南アジア・南アジアを対象領域とし、近代及び現代に重点をおいている。所長(Director)は Far East in World Politics (rev. ed., 1952)の著者として我国にも知られている G. F. Hudson 氏である。研究所に所属する Fellow は、同氏のほか、1957年10月現在で、次の五氏である(括弧内は専門分野)。

- (1) G. R. Storry (日本近代史) — The Double Patriots: A Study of Japanese Nationalism (Chatto and Windus, London, 1957)の著者。1940年前後に約3年間小樽高商で教鞭をとり、戦後にも再度日本へ来られた。現在、ペリカン文庫の中の近代日本史を執筆中のよし。
- (2) S. Rose (南アジア並びに東南アジアの憲政の発展及び政党)
- (3) D. E. Watkins (中国近代史及び中国近代文学)
- (4) R. Iyer (印度近代政治思想) — 氏は印度の少壮学者で、同氏の占める Fellow の地位は印度政府の寄附にかゝる。

(5) D. E. T. Luard (中国の共産主義体制) — 氏は1926年生れて、ケンブリヂ大学出身、1950年外務省に入り、1951年から北京に勤務し、1954年本省に戻つた(英国外務省職員録1957年版による)。仄聞するところによると、氏は1956年のスエズ問題に感ずるところあつて外務省をやめ、オクスフォードに来られたよし。

研究所は毎週一回(火曜)セミナー(Seminar in Far Eastern Studies)を開き、研究所のメンバーのみならず、広くオクスフォード内外から人を招いて報告をきき、討論を行つている。現在オクスフォードで研究中の東大法学部助教授福田歓一氏は、このセミナーにおいても常連の一人として活躍し、1957年2月26日には“Political Parties in Post-war Japan”と題する報告をされている。なお、このセミナーは、オクスフォードの1957年秋学期(Michaelmas Term)の講義予定表(Schedules of Lectures)には、近代史学部(Faculty of Modern History)、東洋学部(Faculty of Oriental Studies)、及び社会科学部(Faculty of Social Studies)の3項目の下に、重複して、Hudson氏指導のセミナーとして記載されている。— 因みに同じ講義予定表によると、東洋学部では、H. H. Dubs教授が中国古代哲学を、Wu Shih-ch'ang氏とHawkes博士が中国語を、又1952~54年に京都に来ておられたG. Bownas氏が中国語と日本語(日本人の中国研究の業績を讀めるようにする為の)を教えておられる。

筆者は1957年10月15日及び10月22日の両度、St. Antony's Collegeの極東研究セミナーに出席する機会をえた。10月15日にはHudson氏が“Marxism and the Asiatic Mode of Production”と題して、Wittfogel教授の名著Oriental Despotismについて報告され、10月22日にはStorry氏が“The Political Career of Prince Konoye”と題する報告をされた。2回とも約20名の参会者があつた(研究所創設当時はセミナーの出席者は数名を出でなかつたよし)。報告は午後5時から約1時間。ついで7時近くまで、かなり活潑な討論が行われる。セミナーが終ると別室でシェリー・パーティーがあり、7時15分になると振鈴を合図にカレヂのメンバーはガウンをつけて、地下にある古風な食堂へ晚餐にあつまる。筆者は、10月22日にはこのカレヂの晚餐に招かれた。食後には、カレヂのSenior Common Room(Fellowsの談話室—学生の談話室はJunior Common Roomという)でのコーヒーやお茶を啜り乍らの雑談に加わり、更にHudson氏とともにStorry氏の私宅に招かれて、ビールをのみながら、同氏愛蔵の日本の流行歌や童謡のレコードを拝聴、同夜はカレヂにHudson氏の客として一泊させて頂いた。

この極東研究セミナーにおける報告の選集が St. Antony's Paper としてロンドンの Chatto and Windus 書店から逐次刊行されることになっている。近刊予定の第一冊の内容は次の通り。

- (1) G.R. Storry: "The Mukden Incident of September 1931."
- (2) G.F. Hudson: "The Sino-Soviet Alliance Treaty of 1945."
- (3) Rhagavan Iyer: "Economic Planning in India and China."
- (4) S. Rose: "The Asian Socialist Conference of 1953."
- (5) Commander E.H.M. Colegrave: "Sino-Japanese Peace Talks in 1938." (Translated from Diary of General Ugaki).
- (6) G.L. Arnold: "The Imperial Impact on Backward Countries."
- (7) G.E. Harvey: "The Wu People of the Burma China Border."
- (8) D.E. Watkins: "Some Notes on Chinese Language Reforms."

研究所付の Fellow の一人である Rose 氏は1956~57年に6ヶ月にわたり、南アジア・東南アジア諸地方に旅行された。Watkins 氏は、筆者の記憶にして誤りなければ、現在中国に行つておられる筈である。また、Hudson 氏は今年中に、米国における極東研究の状況を視察する為に、渡米される予定である。

1956年3月には、研究所の主催で、28人の学者・実務家の参加をえて、印度シナに関する会議 ( Conference on Indo-China ) が5日間にわたり St. Antony's College において催された。将来、極東の現状に関する同様の会議を更に催したいよしである。

Oxford の中央図書館たる Bodleian Library には人も知るように龍大な漢籍のコレクションがあり、現に中国書の蒐集を、言語と文学に重点をおきつゝ続けており、又、Far Eastern Library にも7万冊の中国書と2000冊の日本書があるが、St. Antony's の極東研究所においても、現代史を中心にして極東関係の図書をぼつぼつ集めている。(1958年2月3日 坂野正高)

#### ハーヴァード大学の中国政治経済研究

ハーヴァード大学では1955年から、John K. Fairbank 教授を中心にして、中国政治経済の研究 ( Chinese Economic and Political Studies ) をはじめ

た。まだはじまつて3年に満たないけれど、着々と成果をあげ、すでに次のような研究報告書ができあがり、印刷をまつばかりになっている。

Albert Feuerwerker; Industrial Enterprise in Modern China: Sheng Hsuan-huai and the Kuan-tu Shang-pan System.

Immanuel C. Y. Hsü, translator; Intellectual Trends during the Ch'ing Period, by Liang Ch'i-ch'ao. A translation. Introduction by Benjamin Schwartz.

A. Eckstein and J. K. Fairbank, eds.; Chinese Economic Development.

Tse-tung Chow; The May Fourth Movement.

Ping-ti Ho; The Population of China.

Tung-tsu Ch'ü; Local Administration in China.

A. Eckstein; Communist China's National Income.

E-tu Zen Sun; Dictionary of the Terminology of the Six Boards. A reference work for researchers on the Ch'ing period. First three sections out of six drafted and being duplicated to secure critical comment.

James T. C. Liu; Wang An-shih and his New Policies: a Reappraisal.

Shun-hsin Chou; China under Hyperinflation, 1937-1948.

Kwang-Ching Liu; Steamship Rivalry in China: American, British, and Chinese Enterprises, 1862-1885.



以上の研究について、次の研究も、1959年の秋までには、いずれも完成する見込みのことである。

K. C. Chao; Economic Planning and Administration in Communist China, Documents and Bibliography. Continuation of a series of similar volumes.

Immanuel Hsü; China's Entrance into the Family of Nations. History of institutional growth in China's modern foreign relations.

Kungtu C. Sun; Statistics on the Agrarian Economy of Manchuria.

Tse-tsung Chow; Aspects of Economic Thought in the Late Ch'ing Period.

Frank H. H. King; The Chinese Monetary System 1800-1935. Based on a background of monetary research in HongKong and other British colonies.

Shun-hsin Chou; The Economic Development of Manchuria 1900-1945.

M. Banno; The Origins of the Tsugli Yamen. Institutional development in Ch'ing foreign relations, ca. 1858-61. Being developed partly from articles published in Japanese.

Fred Hung; Rates and Patterns of Industrial Growth in Modern China 1920-1956.

Ying-wan Cheng; Development of the Chinese Post Office. A case study of institutional modernization in the XIX century.

Eckstein, Fairbank and Yang; Economic History of Modern China: An Outline. Being developed from outline of 1956.

なおこのプロジェクトでは、 Special Series として、次のような研究書を刊行した (\*印は近刊)

Liang Fang-chung; The Single Whip Method of Taxation in China, 71 pp., 1956. Translation by Wang Yü-ch'uan.

Harold C. Hinton; The Grain Tribute System of China (1845-1911), 163 pp., 1957. Harvard Ph. D. Dissertation, revised.

Ellsworth C. Carlson; The Kaiping Mines (1877-1912), 174 pp., 1957. Harvard Ph. D. dissertation, revised.

K. C. Chao; Agrarian Policies of Mainland China: A Documentary Study (1949-1956), 276 pp., 1957. One of a series of such volumes by Dr. Chao.

Edgar Snow; Random Notes on Red China (1929-1939), 140 pp., 1957. Based on Snow's notebooks kept as a journalist in China.

\* Edwin G. Beal; Jr.; The Origin of Likin, 225 pp., Columbia Ph. D. dissertation.

十 佐々木正哉君の議院図書館便り

佐々木正哉君は1957年11月アメリカに渡り、それから58年2月末までワシントンに滞在して、議院図書館および国立古文書館で資料を漁りました。同君の手紙にはいつも全面に資料のことが記されているのですが、その二通をここに抜き書きします。なお書名の後に括弧して(N-2-F-409) (271) という風に記してあるのは、それぞれ東洋文庫、当委員会の間架番号を示すものです。

前略。昨日まで一応議院図書館のカード調べを打ち切り、今日から目ぼしいものを持ち出して調べています。先ず、李鼎芳著「曾国藩及其幕府人物」(貴陽、民国35年)が面白いと思います。あるいは日本にもあるかも知れませんが、私は初めてお目にかゝる本です。

曾国藩幕下にあつた100人程の人物を色々な面から分析したもので、引用している資料も極め



て豊富、労作です。曾国藩を中心とする一大集団の内部構造がかなり良く分析されており、この後の李鴻章や張之洞・袁世凱等の権力構造を分析する場合にも大いに参考になると思います。但し本書は専ら上部構造のみを問題としたものでありますから、これと一般農民との関係は残されています。この外にも戦時中に出た伝記・年譜等に面白いものが多いのですが、哀しいかな例の「湖北革命知之録」と同様、ボロボロの紙で、恐らく写真にとつたら読めないであろうと思われる様なものが多いのは甚だ不便です。(1957年11月30日)

拝啓、お正月の休みも終り、文庫のピンポンも再び活気を呈していることと思います。小生、最近、先ず国立古文書館に赴き、3時か4時に議院図書館に帰り、夜の10時迄漢籍をくることが日課です。国立古文書館の文書は Despatches と Correspondence の二つに分れ、前者はマイクロ・フィルムに全部とられていますが後者は全然とられていません。後者が各領事等に宛てた支那官憲の照会文で、漢文文書はこの中にあります。但し漢文文書が全部あるわけではなく、上海の如きは殆んど翻訳された綴りで、漢文のままのものは僅かです。漢口のもは反対に大部分が原文書の綴りです。内容は多岐に亘つていますが、釐金納入(外商の)関係、外人と華人間の紛議、教案等に関するものがかかなりありますが、殆んどは問題が余りにも些細であるか、或は周知の問題に関するものである場合が多く、未だに特に興味ある文書には接しません。尤もまだ漢口のもを1890年程まで見ただけですから、全体についての評価は出来ません。兎も角、目下のところ、国立古文書館では消耗するのみというのが実情です。これに反して議院図書館の方は清末当時の奏議、文集、年譜に面白いものも多く、時間的にも無駄がありません。

議院図書館に来てから主として曾国藩及び李鴻章幕下の人物の伝記・奏議・文集を中心として見っていますが、資料が実によくそろつているので、御参考までに曾国藩幕下の士の著書で、議院図書館にあるものを次に列挙して見ます。但し、曾国荃・左宗棠・李瀚章・李鴻章・薛福成・郭嵩燾等は必要がないと思いますから省きます。(大体年令順です)

錢泰吉「甘泉郷人稿」 24巻6冊附年譜 (IV-2-F-409)

汪士鐸「汪梅村先生集」 12巻8冊、「梅翁詩鈔」「詞鈔」5巻、「筆記」6巻、5冊 (IV-2-F-314)

呉嘉賓「求自德室文鈔」 12巻6冊

羅汝懷「綠綺草堂文集」 30巻、「詩集」20巻、「外集」2巻、「別集」2巻、16冊

呉敏樹「梓湖文録」 8巻5冊、「湘輶叢刻」 13巻6冊

周騰虎「餐為華館遺文」3卷、「隨筆」2卷、3冊  
吳坤修「三恥齋初稿」8卷2冊  
劉蓉「養晦堂文集」10卷「詩集」2卷（N-2-F-305）「思辨錄疑義」1卷、7冊、  
「劉中丞遺集」16冊  
彭玉麟「彭剛直公奏稿」8卷8冊（II-13-B-175）  
方宗誠「方柏堂全集」31種、60冊  
李元度「天岳山館文鈔」40卷、14冊（N-2-323）  
俞樾「春在堂全書」39種、100冊（V-2-191）  
郭崑燾「雲臥山莊別集」5卷2冊  
張裕釗「濂亭文集」8卷2冊（N-2-F-279）  
楊象濟「汲庵文存」6卷10冊  
李鴻裔「蘇鄰遺詩」2卷、「統集」1卷、1冊  
王闈運「湘綺樓全書」19種、86冊（王壬秋全書）、102冊（V-2-214）「湘綺樓  
日記」32冊（II-10-D-34）、「湘綺府君年譜」（王代功撰）6卷2冊  
黎庶昌「拙尊園叢稿」6卷、鈔本、2冊（N-2-F-318）  
吳汝綸「桐城吳先生全書」6書、22冊（N-2-F-178）  
何応祺「守默齋詩稿」1卷、雜著1卷、4冊  
程鴻詔「有恆心齋集」9種、12冊（V-2-189）  
李榕「十三峯書屋全集」8卷4冊

以上の内に曾幕の重要人物は大部分含まれていますが、この外に陳士杰（官至巡撫）、李興銳（總督）、李宗羲（總督）倪文蔚（巡撫）錢應溥（泰吉之子、尚書）丁日昌（巡撫）唐訓方（巡撫）等がありますが、これらの人の著書は見るを得ません。

なお曾國藩の伝記には、

蔣星德「曾國藩之生平及事業」

范文瀾「漢奸劊子手曾國藩的一生」

胡哲敷「曾國藩」（民国32）

蕭一山「曾國藩」（民国33）（267）

黎庶昌「曾文正公年譜」（光緒2..6冊）（II-10-C-25）

何貽焜「曾國藩評傳」（民国32）（271）

王德亮「曾國藩之民族思想」

王定安「求闕齋弟子記」(光緒2・3冊)(114)

胡哲敷「曾國藩治學方法」(民國24)

王定安「曾文正公事略」(光緒元、4冊)

等があります。

左宗棠伝記としては、羅正鈞の全集本の外に、

戴慕直「左宗棠評伝」(民國32)

秦翰才「左文襄公在西北」(民國34)

があります。

単行の李鴻章の伝記には見るべきものなし。郭嵩燾「玉池老人自叙」は佳書。また曾國藩の末女紀芬の「崇徳老人八十自訂年譜」(民國22)(II-10-C-7)も貴重な資料を含んでいます。羅沢南には「羅忠節公年譜」(同治2・1冊)(II-10-C-70)があります。

曾幕人士の多くが挙人・進士出身であるのに反し、李鴻章幕下には科挙及第者が極めて少なく従つて李幕は前者の如き壮観はなく、値も亦劣る様に思われます。李幕人士の所著について目下整理中ですが、出来ましたらお知らせ致します。(1958年1月12日)

2月25日にワシントンを発ち、25,6日はホテル、7日にコロンビア大学の寮に入りました。East Asiatic Library は議院図書館などに比べれば、はるかに小型ですが、中に若干面白いものもあります。最初に目をつけたのは王慶雲の文集(戦後の出版)「興辦通州実業章程」(4冊)、周学熙の別伝等であります。もつとも王慶雲の文集は議院図書館にもありましたが、ここまで持越したもの。「通州実業章程」は大生紗紡や墾牧会社の創設以来の一件書類、事業成績等収録してあります。この図書館は本を外へ持ち出して良いので頗る便利、次々と宿舍に運んで検討中です。そのうち珍本が見つかったらまたお知らせします。コロンビア大学のすぐ近くに、The Union Theological Seminary があり、この図書館には支那伝道関係の文書があるから、見てみるがよいと、フアーズ氏から勧められたので、見るつもりです。もし面白ければこちらに主力を注いでもよいと思つています。(1958年3月2日、ニューヨークにて)

《 批評と紹介 》

Columba Cary-Elwes: China and the Cross; Studies in  
Missionary History.

1957, London, xii 323 p. (1003)

矢 沢 利 彦

中国におけるカトリック布教とプロテスタント伝道を一書にまとめた概説書としては、1929年に公刊された K. S. Latourette; A History of Christian Missions in China が、その公平な見方と学的水準の高さによつて、大いに学界を裨益して来た。しかしこの書は余り専門的なと、ことに近百年間におけるプロテスタント伝道史に重点を置いたことのために中国伝道史を鳥瞰しようとする一般の読者には必ずしも適当な概説書とは言えなかつた。その点ここに紹介する新著は聖トマスの伝説から中華人民共和国におけるキリスト教までを本文284頁のなかに満遍なく按排した専門家にも一般読者にも向く好適な概説書と言えよう。もつともアヘン戦争以前の部に180頁を費したのに対して、以後の部に100頁しか割かれていないのは少し均衡を失するのではないかと思われるのであるが、近百年のことは、詳しくは Latourette に譲るという意図があつたようで、余力が注がれておらず、同氏の記述を要領よくまとめたという程度に終つている。

これに較べると明末からアヘン戦争までの時期、すなわち著者のいう Jesuit Age に関する記述は、著者が八方の文書館や図書館に通つて得た資料を充分に利用して書いたもので、極めて精彩がある。この時代に関する Latourette の記述は、ことにその脚註など今日でも捨て難いものがあるが、ここ30年ばかりの間に宣教師の手記・書簡集や、かれらの業績に関する研究がいくつも公刊されたため、すでに古くなつてしまつているので、新著はこれを補うものとして今後も大いに利用されることであろう。評者はこの項を通読して色々教えられるところが多かつたが、そのうち一つだけをあげておこう。

著者は日本や中国において禁教が行われた一因として、オランダ人やイギリス人が商売仇であるポルトガル人を倒すために、ポルトガル宣教師についてあらぬ噂を立てたということをおあげている。そしてその証拠としてつぎのような挿話を引いている。1633年 Sebastico Vieyka が日本で殉教したという報がマカオに入った時、マカオのポルトガル人はページェントを行い、花火を打上げてこの殉教を祝つた。ところがこの報を得たオランダ人は早速その記録を日本政府に送つてポルトガル人の信用を墜そうと試みたということである。

また1622年オランダ人がマカオを攻撃したので、ポルトガル人はマカオに要塞工事を施した。これがポルトガル人、さらにはポルトガル宣教師に対する中国人の疑心を増させることになった。以上のような見解はこれまで全然なかつたわけではないけれども、こういう具体的な例をあげて説いたのはまだ見たことがない。なお中国キリスト教史の研究には日本やインドの布教史を調べ、これと比較検討しなければ発展性に乏しいと思われるが、そういった試みはほとんど採られていない。

唐元時代の景教、元代のフランシスコ会布教に関する記述は主として Youle and Cordier: Cathay and the Way Thither により、これに Moule, Budge, Komroff および佐伯諸氏の所論を参考にしたもので、特に創見と言えるものはないようであるが、中国史に関する知識の乏しい者にもよく分かるような配慮が施されていて便利である。

われわれにとって最も興味のある太平洋戦争終了後における中国のキリスト教事情は、エピソードという一章に約20頁に亘つて略述されている。著者はこれは歴史ではなく、現在と過去の光のなかで見ようとする者の単なる瞥見であり、印象であると断っている。著者はこれをヨーロッパのキリスト者の立場から書いているから、その見解は人民日報その他の新中国出版物の記載とは真向から対立している。実状は両方の言分を聞かなくては分からないから、つぎにその大要を紹介しておこう。

『カトリック教会に対する共産党の態度は極めて明確な政策を追つて来た。1945年8月15日から、1948年9月奉天陥落によつて予告された南方への大進撃の直前まで、共産党の支配する北方の各地でははげしい迫害が続いた。少なくとも58名(主として中国人の)の司祭が殺された。プロテスタントでは山東省だけで25名の殉教者があつた。1947-8年の冬が最もひどく、人民裁判がどの村でも行われた。各地で教会や修道院が焼かれ、司祭や信者が虐待されたり、殺されたりした。それにもかかわらずローマはなにびとも強制されるか、老齢または病気でない限り、位置を離れないようにと指令し、教皇使節 Riberi もこれを繰返した。かれ自身も共産軍が南京に到着して強制的にかれを追出すまでそこに留つた。プロテスタント宣教師も1951年まで中国内地に留つていたが、この年六百名にのぼる内地会の宣教師は引上げた。この迫害の理由としては、内戦が理不尽の暴挙を生んだこと、共産党員の眼には教会が明らかに親蒋介石的であると映つたこと、1900年の義和団事件に対する懲罰に復讐することであつたこと、神および宗教に対する共産党員の執念深い憎しみなどがあげられる。

1948年に突如として暗雲は吹き飛ばされ迫害はやんだ。共産党員は笑みをたたえて手を差しのべた。この宥和の時期は1950年まで続く。この政策変更の真の理由はなにか。それは(1)宣教師を虐遇したことに対する全世界の与論の攻撃に動かされたこと、(2)共産党は広大な地域を手中に握つたばかりであつたから、民衆をがっちり手に入れるまで、敵対的要素の存在をできるだけ制限しておく必要があつたこと、(3)民衆がまだ十分に教育を受けていなかったから、かれらはこれまでかれらに学校・病院・孤児院というようなものを与えて来た施設に激しい攻撃を加えることを支持するかどうか分からなかつたこと、(4)党は接収員が見つかるまで現社会の経済的・社会的構造、教育用建築物、病院などをそのままにしておこうと望んだことである。信者たちは征服者の誠実性と平和の永続性に対して期待をもつていなかったため、この機会を利用して再組織に努め、司祭が追放される日に備えて、書物を配布し、司教や司祭はあらゆる種類の労働者に身を変えた。この間共産党はミッション系大学の監督に乗り出しては来たが、外国からの資金援助が続いている限り、その名目的な所有権はキリスト教徒たちの手に残した。

1950年3月から積極的な迫害が始まった。政府は革新教会の設立に乗り出した。この運動の牛耳をとつたのが呉耀宗と周恩来であつた。かれらはカトリック教徒を教皇庁から分離させようと図つた。教皇を攻撃するためにまず教皇使節 Riberi に対する非難が行われた。かれを否認するための集会が全国的に開かれた。信者が教会を出たところをわけの分からない行列のなかにぶちこまれ、あとでそれが反教皇使節運動のデモであるということを知つたということも起つた。この運動ははじめは成功したということであり、信者は熱心にこの分離教会を支持しているという噂が共産主義者によつてばらまかれた。しかし中国の全カトリック教会は教皇庁に対して変らぬ忠誠を捧げていた。

信者のうちから分離教会運動を起そうとして失敗した政府は、1951年の中ごろから強権を発動し、外人宣教師、内地人司祭・修道士の逮捕・放逐を始めた。その結果1952年には143の教区ないしそれと類似の区のうちで、87区は司教をもたず、これらの司教のうちで43名は国外に追放され、7人は獄死、18人は獄中にあり、のこりの19人の運命は不明という状態であつた。外人司祭のうちで2000名以上が追放されていた。迫害は外人に対してだけでなく、内地人にも向けられ、200名以上の中国人が獄に投ぜられ、100余名が殺害された。勿論多くの外人司祭も投獄され、また殺された。教会施設はプロテスタントであろうと、カトリックであろうと法外な課金を加えられることによつて極貧の状態に陥つた。上海の震旦大学の学長は百万アメリカ弗に当る中国金を課された。

カトリックが建てて、管理していたあらゆる中学校・小学校・専門学校は1953年までに共産政府によつて没収された。宗教信仰が公許されているという見せかけをつくるために手に着けられなかつた大都市の教会を除いて、ほかの教会は没収された。多数の大病院・養老院・幼児院もとりあげられてしまった。このことはプロテスタントの施設に関しても同じことが言える。それらはすべて肅清され、没収され、無神論的プロパガンダのセンターとなつた。全中国にわたつて洗脳教育が行われた。宣教師や信者は自分が有罪であるという文書に署名することを独特の方法によつて強制された。これによつて大がかりな人民裁判が全国的に催され、漢口でアメリカ人の修道女が幼女を虐殺したという科で裁かれた時には実に八万の群衆が集められた。

戦時中にダブリンでフランク・ダフ (Frank Duff) によつて創始され、のちに中国に入つたカトリックの在俗組織である信者信心会 (The Legion of Mary) は共産政府の政策に対して最も勇敢に戦つた。この会を導入したのは教皇使節リベリである。同会に属するヨハナ爾という女性は共産党員の眼をかすめながら華北の各地に出没し、支部を四百も設けた。国家教会 (State Church) が共産党によつて造りあげられたころ、かの女は逮捕され、新教会の組織者の地位に就くようにとの申し出を受けたが、これを拒絶したため裁判にかけられ、10年の刑に処せられた。その後会は17,000名の行動的な会員を有し、千の支部をもつまでに成長した。絶対的な自己犠牲の精神と聖庁に対する忠誠心を植えつけられたひとびとは、いたるところで教階制度の立場を支持して活動した。その結果国家教会の試みは失敗に帰した。共産政府は信心会に属することは叛逆であり、死刑にあたることであると宣言した。中国のいたるところの町に反信心会の機関が設置されたが、信心会のあるところではどこでも反キリスト教運動は失敗に帰した。

1954年の終りに中国に残留していた外国宣教師の数はごく僅かなものに過ぎなかつた。当時400名にのぼる中国人司祭が投獄されていたと言われる。1954年の終りまでに殺された司祭・修道会員・修道女の数は166名に達した。このなかには虐待されてもうちよつとで斃れてしまうところまでいつた何1,000人かのプロテスタント牧師やカトリック司祭は入つていないし、キリストのために死んだり、虐待された何1,000人かの名もない俗信者たちは入つていない。デイオクレチアヌスの時と同様、今日でも殉教の苦難は酬いられずに終ることはないであろう。キリストの時は来るであろう。

1955年、上海の ? (Kiong) 司教は「いたるところですべてのひとに告げよ。中国教会は滅亡せず、曾つてよりも一層立派に存在しているということを。新しい攻撃が始まら

うとしていることは確かであるが、今日まで教会はあれほど多くの戦いに克ちぬいて来たのであるから、今度もわれわれは勇気を失うことはないであろう」と書いた。この年の5月6日には共産政権が樹立される以前に働いていた6000名の司祭のうちで残っていたのは僅かに33名で、そのうち20名は獄中にあつた。このほかに16名の外国修道女と1名の助修士が残留していた。』

以上の要略によつてもうかがえるように著者は新中国におけるカトリックの動静を述べるのに急で、プロテスタントについてはほとんど述べるところがない。これは片手落なことで、資料が足りなかつたのか、述べるに足らないと考えたのか、その点を明らかにして置いてもらいたかつた。そうでなければプロテスタントにおける革新運動は成功したと見られても仕方がないであろう。なお新中国のキリスト教状勢を知る資料としては評者がさきに「アジア研究」第三号で紹介した Tennien, Mark: No Secret is Safe behind the Bamboo Curtain, 1952 のほかにイエズス会の Monsterleet, Jean 師による Martyrs in China というのが本書と同じく Longmans 書店から出ているようであるが、評者はまだこれを見ていない。中国側のものとしては、いずれも人民出版社から刊行された。

人民出版社編集部編「基督教人士的愛国運動」1950年、北京。

人民出版社編集部編「天津天主教革新運動的成就」1951年、北京。

人民出版社編集部編「徹底割断基督教与美帝国主义的聯系」1951年。

などがあることを附記しておく。

Wolfgang Franke: Chinas Kulturelle Revolution; Die Bewegung vom 4 Mai 1919.  
1957

野 村 浩 一

本書は Janus-Bücher (世界史に関する叢書)の中の1冊として刊行された、五四運動についてのきわめて要領のよい紹介書である。著者W・フランケは、かのO・フランケの子息であつて、目下、ハンブルグ大学の中国語学・文化の主任教授、明代を専攻する現代ドイツの中堅学者である。内容は3章に分れ、第1章、事件の経過、第2章、意味と背景、第3章文化革命と題されて、五四運動の意義が歴史的に探究されているが、題名が示すように、この本は文化史的、或いは精神史的な視角からする五四運動へのアプローチという観点が貫かれている。紙数に制限があるので、ここではごく簡単に内容を紹介することにした。

さて第1章では、最も狭義における五四運動の経過、すなわち、第一次大戦後、パリ平和会



議における中国の立場、二十一ヶ条をめぐる中国と日本の関係、そして5月4日の事件と、それに端を発して次第に波及して行く運動の過程が描き出される。換言すれば、この部分は、五四運動そのものの歴史的な叙述である。従つてその内容に関しては、特に事新しい見解や資料が提出されているわけではなく、むしろ通説に従つた概観といつてよからう。このことは、第2章の、運動の政治的・経済的・社会的背景を述べる箇所においても、おとむね妥当するのであつて、ここでも読者の理解に便ならしめるための配慮という色彩が濃厚である。本書の特色は、やはり「文化革命」と題する第3章に存在すると考えてよい。

たゞ彼が第2章第1節「五四運動の意義」の中で、この運動の評価に関しては、それをアヘン戦争以後の中国史の全過程の中に位置づけるべきことを強調するのは、注目しておかねばならない。彼はここで毛沢東の「新民主主義論」を引用しつつ、この運動が、それ以前の諸々の革命の成果の上に立ちながら、更に新しい一歩を踏み出したものであることを指摘する。すなわち、太平天国革命は伝統的な農民叛乱の色彩をなお拭拭し切れず、戊戌変法は国家組織の徹底的な改革を目指しつつも、それを根柢的にくつがえすことを望まず、義和団は帝国主義からの解放を志向しながら、何等の成果を上げえず、さらに辛亥革命は、清王朝を打倒したとはいえ、それは中国のその後の進展のための諸前提を作り出すにとどまつたのに対して、五四運動はこれらの積み重ねの上に依拠しつつ、「中国革命の展開」の中で、「伝統的な中国から、近代的な中国への決定的な一歩」を印したとするのである。それはまた、中国がもはや「諸列強の政策の単なる対象」とどまるものではないことを示すものでもあつた。しかもこの運動は中国及び世界のその後の歴史の中で、最も重要な役割を果すべき二つのイデオロギー、すなわち、民主的自由主義並びにマルクス、レーニン主義を、共にその胎内にはらみつつあつたという事情によつてまさに世界史的観点においても、正当に評価されなければならないものをもつている。そして著者はこの運動の意義を確定するためには、就中、中国におけるその精神的背景の下に考察が進められなければならないと説くのである。

さて上述のような叙述に続いて第3章は9つの節にわかたれている。すなわち、(1)新しい知識階級と文化的革新の運動、(2)儒教に対する斗争、(3)デモクラシーとサイエンス、(4)文学革命と文体改革への努力、(5)伝統の新しい評価、(6)宗教の排斥、(7)婦人解放、(8)中国におけるマルクス主義の萌芽、(9)結語である。以下順を追つて重点的にその内容を述べてみよう。

(1)由来中国の学問は儒教を正統派とする所の科学考試によつて緊縛されていたが、19世紀末より、ようやく新学が流入し、就中1905年の科学廃止と1911年の革命は、ここに新しい知識階級を生み出すことになつた。勿論、こうした動きはその前史を持たないわけではな

い。康有為によつて代表される運動、特に1895年の公車上書は、北京に1000余人の華人を集め、直接皇帝に上書したという意味において、まさにその前駆たるべきものであつた。しかしながら、19世紀の諸運動は、いうまでもなく、改革運動ではあつても、決して革命運動ではなかつた。それは様々の新しい理念にも拘らず、根柢的な思考においては、なお伝統的規範をかたく保持していたのである。これに対して、1911年以後の諸情勢、及びそれを背景として勃発した五四運動は、新しきものと古きものとの決定的対立を、最も赤裸々に打出したのであつた。新しき学問、すなわち西洋の科学を信奉する大学教授、学生がこの文化運動の担い手であり、陳独秀を代表とする「新青年」こそは、その最も戰鬥的な武器であつた。従つてここでは、古きもの—中国的なもの、新しきもの—西洋的なものとの対立が、常に強調される。「西洋的方法と中国的方法は絶對的に相異なるものであり、政治であれ、科学であれ、道徳であれ、文学であれ、両者は決して相交わることのないものである」(陳独秀) こうした鋭い弁別によつて、烈しい批判にさらされたのは、あらゆる中国的な伝統、特に儒教と、それに由来する儒教的価値尺度であつた。ここから、反儒教というスローガンによる激烈な戰鬥が開始されるに至る。

(2) 事実、儒教はこの国家的危機において何等為す所なき無用の長物であつた。O.フランクの言葉を借りるならば「儒教は現在の危機において、いかなる役割を果し得るか? 答えは余にも明らかである。それはいかなる役割をも果し得ない」のである。だが、そのみではなく袁世凱の復辟運動や孔教会の動きに見られるように、儒教は逆に反動の拠点ともなり得るものであつた。それ故にこそ、陳独秀は儒教をば專政体制と不可分であると規定し、共和国及びデモクラシーの原理とは全く両立せざるものと見たのである。そうして儒教の攻撃は、陳独秀を始め、吳虞等によつて、最も精力的に遂行されたのであつた。

(3) ところで彼等が伝統的中国文明を投げ棄てて、西洋の文化を摂取しようとした時、その名前の下に理解されたのは、いうまでもなく「デモクラシーとサイエンス」であつた。この兩者こそは、彼等にとつて輝かしい導きの星であつた。彼等は「デモクラシーとサイエンス」によつて、伝統的束縛、特に儒教の束縛から個人を解放し、あらゆる桎梏から脱却した個人によつて、中国が西洋と同様の経過を辿りつつ発展することを夢みたのである。ただこの場合、彼等の西洋に対する理解が正しかつたかどうかは、きわめて疑わしい。それはむしろ甚だ表面的であつたとすら言い得るであらう。彼等は18世紀以前の西洋については、何等の注目も払わなかつたし、彼等の「デモクラシー」という概念は、マンチエスター・リベラリズムのそれにほかならなかつた。「サイエンス」についても事情は同様であつて、陳独秀はその中に迷信に対

する最も有力な武器を見出しはしたけれども、彼はこの場合、迷信という言葉の下に、あらゆる宗教的信仰を一括して廃棄しようとしたのである。それはともあれ、こうした風潮に一層の拍車をかけたのは、1919から21年にわたるデューイの来訪であり、またその使徒としての胡適の活躍であった。

(4)だが胡適については、1917年の「文学改良芻議」に始まる所謂「文学革命」における彼の役割について、注目しておかねばならない。胡適の白話文の提唱は、本質的には、純粋に文学的な観点からなされたものではあつたけれども、それは社会的政治的な革命の渦中において、全く特別な意味をも獲得したのである。すなわちそれは知的教養を一般化する道を開き、従来文字の智識そのものが社会的特権を意味したという事情を根絶し、読書人の知的独占を排して、ここに民族の共有財産としての民族文学確立への道を準備したのであつた。

(5)ところで「新青年」を中心とするこうした動きに並んで、五四運動において重要な役割を果たしたのは、傅斯年、顧頡剛による雑誌「新潮」であつた。それは「ルネッサンス」としての意義を明確に自覚しつつ「伝統に対する理性、権威に対する自由の運動、及び生命と人間的価値の尊厳の認識」を標榜しその上に立つて、「過去の文化的遺産を近代的歴史的方法によつて再評価しようとする」ものであつた。かくしてここに、神話と歴史の混交の中に埋没していた古代史の研究の端緒が開かれると共に、水滸伝や紅樓夢の文学史的究明が試みられ始めたのである。現在の中国において、マルクス・レーニン主義が公認の国家的教義として確定されると共に、ようやく伝統の束縛から脱却しつつあつた中国の歴史叙述は、再び一つのドグマによつて縛られようとしている。だが中国の歴史学が、この新しいドグマの中に長期にわたつて拘束されるかどうかは疑わしいと言わねばならないであろう。

(6)さて中国においては、儒教、道教、仏教が三つの宗教として存在するが、これらは本来的な意味における宗教ではなく、むしろ各々の道徳体系の表現に過ぎない。特に儒教は根本的に不可知論的であり、且つ純粋に此岸的であつて、彼岸に対する志向を持たないのである。こうした伝統を顧慮しない限り、文化的革新の運動も、またその後のマルクス・レーニン主義の中国知識層に対する吸引力も理解することが困難であろう。ここでは、儒教に対する斗争は、宗教一般に対する斗争を意味したし、あらゆる宗教は迷信として廃棄されねばならなかつたのである。そうして宗教に代るものは、まさしく科学にほかならなかつた。五四運動以来、中国の知識階級は、没宗教的な態度を自覚的に取り始めたのであり、且つこの中から、程なくして、共産主義的、反帝国主義的要素としての、巨大な反宗教運動が惹起されたのである。

(7)儒教一伝統的規範に対する斗争は、それと関連して婦人の解放運動をもたらした。すでに

早く、康有為によつて纏足廃止の運動が試みられてはいたが、五四運動においては、被抑圧者としての婦人を解放するという視点の下に、この運動が取り上げられ、それは婦人の地位の向上と共に、女性の教育、職業の問題をも前面に押し出すものであつた。あらゆる保守的な反対にも拘らず、五四運動が中国の女性の解放において、強力な一歩を進めたことは承認されねばならないのである。

(8)ところで「新青年」を中核とする反儒教—西洋化の運動の中で、それまで主流を占めていたデューイ・イブセン・ミル・バツクスレイ等の思想を押しつけて、マルクス・レーニン主義が強力にクローズ・アップされて来たのは、勿論、1917年のロシア革命に由来するものであつた。陳独秀、及び李大釗が直ちにこれに注目したのは言うまでもない。ロシア革命は中国の前途に対して多大の暗示を与えるべきものを持つていたのである。だがこの場合、中国の天下的世界観がマルクス主義受容に果たした役割は、注目しておいてよいであろう。普遍的秩序という伝統的理念の存在は、ボルシェヴィキの世界革命という理論に対して、特殊の親近性を有するものであつたといつてよい。たゞロシア十月革命は、五四運動に対して直接の影響を及ぼすものではなかつた。毛沢東が、五四運動をプロレタリア世界革命の一環として規定するにも拘らず、コミュニストの存在しない共産主義的行動というのは、明かに誇張であり一面的である。五四運動は何よりも民族的文化的運動であり、社会主義的理念はここにおいては、なお単に従属的な役割しか果たしていなかつたのである。

(9)五四運動は、中国革命のその後の発展に対して、就中、精神的分野におけるコミュニズムの勝利に対して、決定的な意味を有するものであつた。この意義については、毛沢東によつて正当に評価されている。だがこの場合、運動において最も積極的指導的な役割を果たした人物、特に陳独秀、胡適が、現在において不当に過少評価され、また抹殺されていることは正しくないと言わねばならない。現在最高の尊敬を払われている魯迅といえども、もし彼が生きていたなら、その独立不羈の性格からする限り、一政党による思想の国定に対して衝突を起さないかどうかは、保証の限りではないであろう。個人の果たした役割は、歴史的過程の中においてのみ評価されねばならず、彼のその後の態度を顧慮すべきではない。この意味において陳独秀と胡適は、中国の文化革命における第一線の斗士として評価されねばならないのである。

さて以上に要約したように、この書物は五四運動を何よりも文化革命と規定して叙述を進めている。そうした視角からする分析としては、約100貫の小冊子に上述の内容を要領よく盛り上げた著者の手腕を高く評価してよいであろう。特に思想史上における五四運動の意義を適

確に捉えている点は注目に価する。五四を分水嶺とする、西洋的近代諸思想とマルクス・レーニン主義の絡み合いは、いうまでもなく五四文化革命研究上の最も重要なテーマの一つであり、五四運動を通じてマルクス主義が、就中、反宗教＝科学として受容されて行くという著者の指摘は、きわめて示唆的である。ロベール・ギランが、その鋭いジャーナリスティックなセンスをもって、マルクス主義受容の一原因として「方法」という問題を挙げ「方法。これこそ新中国がまさに発見したものだ。方法すなわちマルクス主義である」(「六億の蟻」)と述べるのを考え併せる時、一般に非西欧的世界＝後進国において、「科学」という言葉の有する意義は、深く考慮されねばならないであろう。ただ、新中国の出現が、特に西洋人にとって驚異的な事実であればあるだけ、伝統的な中国そのものの中に、マルクス主義受容の原因を探ろうとし、時としてそれを過大視する傾向があるのは、留意されなければならない。天下的世界観と世界革命論との類比は、やゝ安易に過ぎるであろう。問題は、常に、自己革新を遂げつつある中国そのものの中に設定されねばならないのである。戦後の、西洋特にアメリカの中国研究が、モスコウの影響を強調する「革命輸出論」か、或いは逆に、中国の独自性を強調する「弟二のチトー論」かに偏差する傾向があつたように感ぜられるのを考える時、こうした問題は十分に考慮する必要があると思われる。

なお、著者が国家的教義としてのマルクス・レーニン主義に言及し、また胡適、陳独秀の歴史的评价について、いわば「名誉回復」を試みるのは、著者の中国に対する現状認識に深く関連するものであろう。それについて触れることは、書評の範囲を逸脱するし、且つそれぞれが膨大なテーマたり得るものであるから、ここでの論評はさし控えたい。

最後に、本書を通読して、評者はやはりそこにドイツ流のGeistesgeschichteといった伝統を感じさせられる。こうしたやり方が直ちに中国に適應され得るか否かは、「精神」という言葉が、そのまゝ中国の思想に妥当するかどうかという根本的な方法論の問題を含んでいるとはいえその伝統は著者の観点からする独特のニュアンスを含んだ作品を結晶せしめている。知識社会学を駆使するB. Schwartzを始めとして、社会学的方法を多分に取入れたアメリカの中国研究が進められつつある現在、(Chinese Thought and Institution ed. by J. K. Fairbank, 1957) われわれは、今後一層広い視野に立つた研究が必要とされるであろう。なお取上げるべき問題、興味あるテーマも多いけれども、われわれは、五四に関する様々の問題を、われわれ自身の立場からする研究の中で、統一的に把握するようにつとめなければならないと思われる。

Eugene Wu: Leaders of Twentieth-Century China; An Annotated Bibliography of Selected Chinese Biographical Works in the Hoover Library (Hoover Institute and Library Bibliographical series IV)

Stanford University Press, 1956, vii, 106 p. 26 cm

(604)

The Hoover Institute and Library on War, Revolution & Peace は、1919年に Herbert Hoover によつて創立された。はじめその図書館は主としてヨーロッパの資料を集めていたが、第二次大戦後はその蒐集の範囲を中東からアジア全域にひろめ、現在では中国、日本に関する豊富な資料(欧文・日文・中文を含めて)をもっている。20世紀の中国に関する資料は、中国を除けば、この図書館に世界で一番たくさん蔵されているといつていいであろう。この蔵書の一部はすでに Frederic W. Mote: Japanese-Sponsored Governments in China, 1937-1945; An Annotated Bibliography Compiled from Materials in the Chinese Collection of the Hoover Library (Stanford, 1954)によつて紹介されている。

呉文津氏の編纂する本書は、この図書館が蔵する民国以降に没した中国人、現在生存している中国人の伝記・自伝・回想録・日記類の目録であつて、それに簡単な解説が附されている。また伝記・回想録類のよく載録される新聞、雑誌も12種解説されている。清代の中国人に関しては、"三十三種清代伝記綜合引得"や Hummel: Eminent Chinese of the Ch'ing Period によつてその伝記を知りうるが、本書はこれにつづく民国以後の人の伝記類を知るのに至つて便利である。

なお Hoover Library にこの種の資料が如何に多いかということは、これに載録されている資料464種(雑誌・新聞を除く)のうち東洋文庫所蔵のもの10、この委員会にあるもの40程にすぎないことから知られよう。いや Hoover にたくさんあるというよりも、東洋文庫に如何に少ないかということをも物語つているといつた方がいいかも知れない。

John K. Fairbank (ed.): Chinese Thought and Institutions.  
The University of Chicago Press, 1957, 438 pp. 25 cm

(1023)

Robert Redfield 教授, Milton Singer 教授が共編する

"Comparative Studies of Cultures and Civilization" という  
叢書の一で、さきにスタンフォード大学の Arthur F. Wright 教授が編修した  
"Studies in Chinese Thought" の姉妹篇。 Far Eastern  
Association の Committee on Chinese Thought 主催で、19  
54年9月ニュー・ハンプシャーの Steele Hill で一週間にわたって開かれた  
"The Relationship between Ideas and Institutions"  
に関する会議の結果をハーヴァード大学の John K. Fairbank 教授が編修したのが本  
冊で、同教授の "Introduction: Problems of Method and of  
Content", ハーヴァード大学 Benjamin Schwartz 教授の  
"The Intellectual History of China: Preliminary Reflections"  
を巻頭に、次のような研究が収録されている。

Part I. The Role of Ideas in the Exercise of State  
Power

Wolfram Eberhard; The Political Function of Astronomy and  
Astronomers in Han China

Arthur F. Wright; The Formation of Sui Ideology, 581-604

James T. C. Liu; An Early Sung Reformer: Fan Chung-yen

Charles O. Hucker; The Tung-lin Movement of the Late Ming  
Period

W. T. de Bary; Chinese Despotism and the Confucian Ideal:  
A Seventeenth-Century View

John K. Fairbank; Synarchy under the Treaties

Part II. Thought and Officialdom in the Social  
Order

T'ung-tsu Ch'ü; Chinese Class Structure and Its Ideology

E. A. Kracke, Jr.; Region, Family, and Individual in the  
Chinese Examination System

C. K. Yang; The Functional Relationship between Confucian  
Thought and Chinese Religion

Lien-sheng Yang; The Concept of "Pao" as a basis for  
Social Relations in China

Hellmut Wilhelm; The Scholar's Frustration: Notes on a Type  
of "Fu"

Joseph R. Levenson; The Amateur Ideal in Ming and Early  
Ch'ing Society: Evidences from Painting

notes, index

- Franz H. Michael & George E. Taylor: The Far East in the  
Modern World.

New York, Henry Holt and Company, 1956, 724 pp. 24cm  
(902)

東亞近代史の概説書、また入門書で、巻末には18頁に及ぶ参考文献目録がある。これまでの西洋人が書いたこの種の本は、とかく国際関係に重点がおかれていたが、本著者は、東亞の近代化は西洋との接触の結果であると同時に、また東亞の社会それ自体の発展の結果でもある、と考えて、国際関係のみならず、東亞の社会の究明につとめている。なお著者はともにワシントン大学の The Far Eastern and Russian Institute のスタッフである。

- Franklin W. Houn: Central Government of China, 1912-1928;  
An Institutional Study.

Madison, The University of Wisconsin Press, 1957,  
246 pp. 25 cm  
(978)

1912年に清朝がおれてから、1928年蔣介石によつて中国が統一されるまで、民国はじめの17年間は、ほとんど安定した中央政權になかったといつていい。それほどこの間の中央政府は変転きわまりないものであつたが、そのもろもろの中央政府の構造、機能を詳細





に研究したのが本書。14頁の参考文献目録が附録されている。著者ははじめ中国で教育を受けて南京中央政府に勤務、1948年アメリカにわたつて、ウイスコンシン大学にて政治学を専攻、1953年学位を得、その後スタンフォード大学で研究を続けた。

○ G. William Skinner: Chinese Society in Thailand; An Analytical History

Ithaca, Cornell University Press, 1957  
(1016)

タイ華僑に関する全般的な概説書であるが、タイ国における現在の華僑の地位をしるには歴史的究明が必要であるとして、大体17世紀から現在に至る華僑史を資料に基づいて分析している。

また著者の意図する一つの点は、中共の成立によつて、東南アジア各国の統治政策上さらに重要性を加えた華僑問題に対して、人々の認識をうながすことであり、最後の章では、タイ国における現在華僑社会の一般的状況を記し、タイ華僑の問題点に関しては網羅的に触れている。巻末に18頁の文献目録がある。なお著者は、バンコックの Cornell Research Center の所長であつたが、今はコルネル大学極東科の助教授。前著に、Report on the Chinese in Southeast Asia, December 1950, Data Paper No.1, Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. がある。

○ Horace E. Hamilton: China, Two Generations Ago.  
Denver, Big Mountain Press, 1957, 102 p. 23 cm  
(1007)

著者はコロンビア大学教授。その父母、Guy および Paulin Erunst は長老派 (Presbyterian) の宣教師として1903年に中国にわたつたり、北京から南方へ、保定府、順徳府などを根拠として24年間宣教活動を続けた。その間の家族の経緯を父親の記録と彼自身の記憶から描いたもの。その生活環境をうつした写真19葉は特に面白い。

○ 麦若鵬：黄遵憲伝

上海 古典文学社 1957 112頁. 19cm (2213)

黄遵憲(1848~1905)は広東嘉應州の人。挙人。1877年駐日公使何如璋に従つて日本に来たのを皮切りに、サンフランシスコ総領事、ロンドン総領事、シンガポール総領事など外交官を歴任。日清戦後は弁理湖北洋務局をつとめ、97年湖南按察使となる。この間、康有為・梁啓超と相知り、その変法維新の運動を助けたが、戊戌新政のはじまる直前に病のため退官した。その著には「日本国志」「人境廬詩草」「日本雜事詩」などがある。

本書は、政治家、外交官としての黄遵憲を描こうとしたのではない。その政治活動、外交活動は失敗したが、文芸創作の面では成功をおさめたとして、もつぱら「人境廬詩草」によつて愛国詩人としての黄遵憲を描いている。

なお黄遵憲の伝記、年譜には次のようなものがある。但し「中国史学論文索引上」「東洋史研究文献類目」からえらんだにすぎない。

梁啓超「嘉應黄先生墓誌銘」(碑伝集補13)

「清史稿」卷420

恩光「黄公度先生及其著作」(北京益世報1928・9・1)

錢萼孫「大詩人黄公度年譜」(大陸1-12・2-11)

錢萼孫「黄遵憲年譜」(国学論衡5)

錢萼孫「黄遵憲年譜補正」(国学論衡7)

錢萼孫「黄公度先生年譜補正」(真知学报3-2)

葛賢寧「近代中国民族詩人黄公度」(新中華2-7)

徐松林「黄遵憲与詩界革命」(輔仁広東同学会半年刊2-1)

王先「黄遵憲—戊戌維新運動的領袖」(逸経10)

吳天任「黄遵憲与維新政治」(民主評論4-4)

王 瑤「晚清詩人黄遵憲」(人民文学4-2)

黄鳴岐「黄遵憲詩歌中的民歌風格」(文史哲1957-6)

○ 吳鉄城遺著 四十年来之中国与我(一名・吳鉄城先生回憶録)

民国46年張序 線装本1冊 90葉

(233)

吳鉄城は広東香山県の人。1888年江西九江に生まる。九江の同文書院に学び、卒業後は

瀋陽閱書報社を創立、1911年革命に参加し九江軍政府総参議官となる。第二革命に敗れて13年日本に亡命、翌14年ハワイに渡つたが、16年帰国、翌年広東に軍政府ができると参軍となる。18年孫文とともに広東を去つたが、21年軍政府の成立するとともに民選の香山県長となり、22年には陳炯明討伐のための東路討賊軍第一路司令となる。23年広州市公安局長、広東省警務処長の要職を占め、北伐に際しては革命軍第17師長となつたが、まもなく憲兵に逮捕され虎門に幽居の生活を約4ヶ月おくらねばならなかつた。その後は1932年上海市長、37年広東省政府主席、40年国民党海外部長、41年中央党部秘書長、45年中央執行委員会常務委員、48年立法委員、政治協商会議国民党代表、行政院副院長、外交部長、49年行政院政務委員、国民党非常委員会委員、数年前台湾にて没する。

これは彼の1926年虎門に幽居するまでの回想録である。この間、彼は辛亥革命に参加し、孫文の下にあつて袁世凱や軍閥の勢力に対抗し、1924年の商団事件、25年の沙基惨案の際には広州市公安局長、広東省警務処長の要職にあつた。したがつてその回想録は清末民国初年の歴史に関心あるものにとつては大いに期待されるのだが、事實は一般的な叙述が多く、彼の自らの経験を語る所が少いので、思つたほどわれわれの役には立たない。それでも江西の革命運動に関しては本書でなければ知りえないものが少しはある。

なお回想録には往々にしてとんでもない誤りがあるのであるが、本書にもその欠点はみられる。共進会の領袖であつた張振武は1912年8月、北京で殺されているのであるが、呉鉄城が同年の双十節に彼にあつているのは、その例である。

#### 周善培：辛亥四川争路親歴記

重慶人民出版社 1957 65頁

(2098)

著者周善培(1877-)は浙江紹興の人。挙人。1911年に鉄道国有問題から四川に暴動が起つたころは護理四川総督王人文のもとで勸業道をつとめ、王人文に代つて趙爾巽が総督となると、提法使になつた。勸業道といえば鉄道建設の直接の監督者である。従つて著者は四川鉄道問題の渦中の人であつたわけで、その著者が問題の勃発から旧暦10月初7日成都の独立、ついで10月18日の兵変により尹昌衡都督の出現するまで、自己が成都で経験したところを回想して書いた本書は、史料価値が高い。もつとも、清朝の官吏でありながら終始人民の味方であつたという説明が全篇をつらぬいていて、いささか自己弁明の嫌いはあるが、著者にはこのほこのほか「辛亥四川事変之我」(民国27年刊)という著者がある。わたくしはこ

れをみることはできないが、近代史資料叢刊「辛亥革命」第4冊424～448にその節録があり、同書第8冊630頁にその解説がある。それによると、この「辛亥四川事変之找」は、李劫人の小説「大波」に著者のことが記されているが、その誤りを正したものだそうである。これと本書の関係は明かでないが、全く別個のもののように、ただ本書の末尾に「辛亥四川事変之找」の2節、すなわち王采臣（人文）先生六十寿序と陳士立伝とが附録されている。

なお四川鉄道問題研究の根本史料には、前述「辛亥革命」第8冊の解題によると、次のようなものがある。

三餘書社主人篇「四川血」（「四川路事始末全案」） 1911年

通清堂主人篇「辛亥四川路事記略」民国4年四川成都排印本

王人文「辛亥四川路事在言」石印

彭芬「辛亥遜清政変発源記」1933年

何其芳「吳玉章同志革命故事」1949年

郭沫若「反正前後」1929年 上海書局

このうち、わたくしが原本をみたのは「反正前後」だけであるが、「辛亥革命」第5冊にはこれらが節録されている。本書に収録されている文書、たとえば自保商權書とか王人文の上奏とかいう貴重な文書は、多く「辛亥革命」に収録された文献にもみられるが一勿論、本書にしかみられぬものもある一両者を比較してみると字句に相違がみられる。また明かに著者が他の著書からとつたと思われるものもある。そこで問題になるのは、著者がこの親歴記を書くに当つて、何によつて書いたかということである。著者の手もとにある文書、記録のみによつて書いたか、あるいは巷間に流布されている他人の著書を利用したかということである。この点が本書でも、他の類書と同じように、曖昧なのは、遺憾である。この種の回想録、実見記が最近はたくさんでて、それは非常にありがたいことであるが、それをどのようにして書いたか、どんな記録、文書、文献をつかつたか、もつと詳しく説明してくれば、なおさら幸いである。

○ 中国人民政治協商会議湖北省委員会編：辛亥首義回憶録

湖北人民出版社出版

（1959）

辛亥武昌革命に参加した人たちの回想録・実見記をあつめたもので、新たに書き下されたものも、過去に記録されたものも含まれている。多くは原本を短縮・節録したものである。各篇のはじめに著者の経歴と解題とがあるが、これらを史料として使おうとするわれわれにとつて

は、その簡単な説明がとても便利である。収録された記録は次の通り。なお武昌革命は共進会、文学社の合作でなつたのではあるが、革命成功後も両者は対抗関係にあつた。従つてこの種の回想録を利用する場合には、著者が何れの結社に属したかを考慮する必要がある。著者名の次に(共)とあるは共進会に、(文)は文学社に、(日)は日知会に属したことを示す。

第1輯 1957年刊 218頁

- 江炳靈(共) 章裕昆(文) 座談辛亥首義  
李西屏 李春萱(共)  
熊秉坤(共) 辛亥首義工程營發難概述  
温楚珩(文) 辛亥革命實踐記  
呂中秋(共) 辛亥回憶一則  
陳孝芬(共) 辛亥武昌首義回憶  
范鴻勳(日) 日知会  
劉化欧(文) 我参加革命經過  
郭寄生(共) 辛亥革命前後我的經歷  
梁維垣(共) 辛亥革命自伝之一章  
童 愚 八月十九夜所見及其他  
潘公復(共) 辛亥革命運動中的共進会  
萬鴻階(文) 辛亥革命醞釀時期的回憶  
張文鼎 炮八標起義經過与漢口戰役  
李白貞(共) 我所参加的辛亥革命工作  
許兆龍(日) 辛亥首義之第三十二標  
王保民(共) 武昌首義紀要  
周占奎(共) 工程第八營發難紀実  
李長庚 黃州光復  
辜仁堯 辛亥革命陽夏戰爭述略  
謝楚珩 回憶辛亥首義和招討安襄鄭新經過  
胡 費 辛亥史話

第2輯 1957年刊 226頁

- 梁鍾漢(日) 我参加革命的經過  
(集体回憶) 測繪學堂辛亥武昌首義紀実

諸義平(共) 辛亥革命二十九標首義記実  
 黄世傑(共) 第二十一混成協工隊首義經過  
 魯祖軫(文) 第三十標辛亥首義事略  
 王時傑(共) 第三十二標辛亥首義真相  
 郭瑞庭(文) 湖北新軍在資州反正的回忆  
 李春萱(共) 辛亥首義紀事本末

なおこれと同種のものには、次のようなものがある。

胡祖舜(共)	武昌開國実録	革命文献4
蔡濟民(共)・吳醒漢(共)	辛亥武漢首義実録	革命文献4
邱文彬	辛亥陽夏起義史略	革命文献4
吳醒漢(共)	武昌起義三日記	辛亥革命5
鄧玉麟(共)	辛亥武昌起義經過	辛亥革命5
前文学社同人	武漢革命団体文学社之歴史	辛亥革命5
詠 馨(龔霞初)(文)	武昌兩日記	辛亥革命5
張篤奚	辛亥革命徵信録	辛亥革命5
王樹相	武漢戦記	辛亥革命5
武昌起義清方檔案		辛亥革命5
章裕昆(文)	文学社武昌首義紀実	中国近代史資料選輯
朱家駒	武昌起義雜憶	逸経15
廬広栄	辛亥武昌起義見聞録	地学雑誌7:6.7 建国月刊17:1
共進会宣言書		近代史資料13
卞孝萱	閱爾昌旧存有関武昌起義的函電	近代史資料1

0 楊玉如編:辛亥革命先著記

北京 科学出版社 1958 285頁 21cm

(2220)

黄興が革命前に内地の同志に致したことば「能争漢土為先著、此復神州第一功」から書名をとつたのであつて、辛亥革命の口火を切つた武昌革命の事蹟を、武昌における清末の革命運動から1912年南北統一して民国の成立するまでにわたつて記述したもの。

これまでも武昌革命に関する専著は少くない。たとえば次のようなものである(※印は未見)

- 曹亜伯(日) 武昌革命真史 上海中華書局 民国16年 2冊
- \*楊鐸 武昌革命真史之商榷 民国19年
- \*邱文彬 辛亥陽夏起義史略 河南民国日報社 民国28年
- \*聶隱生 鄂乱彙録初編
- \*辛亥首義同志会 辛亥首義史蹟 民国35年
- 張離光(日) 湖北革命知之録 上海商務印書館 民国35年(重慶初版、34年)
- \*李廉方 辛亥武昌首義記 民国36年
- 胡祖舜(共) 武昌朔国実録 武昌 民国37年 2冊(線装)
- 章裕昆(文) 文学社武昌首義紀実 三聯書店 1952

本書の著者、楊玉如は武昌革命を起した共進会の幹部であつて、革命後は都督府の秘書長をつとめた人であるから、革命を身を以て経験したわけで、誰よりもよく革命のことを知つていたはずである。しかし楊玉如編とあることでも知られるように、多くは前述の諸書によつたよ  
うで一勿論、出典などは記してないが一本書でなければならぬような記述も文書も余り多  
くない。しかしいろいろな文書が豊富に含まれていて、武昌革命の研究者にとっては便利であ  
る。

0 中国僑政学会編：華僑問題資料目録索引

(初編) 台北 海外出版社 民国45年 141頁 22cm (2182)

(続編) 台北 海外出版社 民国46年 99頁 22cm (2182)

台北図書館・僑政学会・僑務委員会資料室など台北各図書館、華僑関係機関の図書資料室に  
ある華僑問題に関する著書、論文の索引。地区別にし、さらにその下を政治、経済・文教・社  
会・史地・匪情・総合に類別し、その資料の現在場所も明記してある。

0 東方学会編：近百年來中国文文献現在書目

東京 東方学会 昭和32年 838頁 25cm 謄写印刷  
(2406)

1851年(清咸豊元年)以後、1954年に至るまでの約100年間に、中国文で出版さ  
れた書籍・雑誌中、国立国会図書館・東京大学中国文学哲学研究室・東京大学東洋文化研究所  
および東洋文庫に所蔵されるものにつき、その書名・冊数・著者編者名・発行年月・所在場所  
などを記したもの。書名・人名・巻数などに誤記が多い。そのみでなく、「書名をもつて、

五十音順に排列し、漢字の読み方は、すべて音読音に従った」と凡例にいいながら、排列はでたらめ、敷文(しきぶん)というような重箱読みもみられるし、漢はしん・ちん・てん・と三様に読まれていて、検索に不便である。発行所と出版所とが違うゆえに、あるいは原カードの誤記のゆえに、同一書が恰も二書の如く取扱われたものは少ない。さらにある本がなかつたり、ない本があつたり。こういった欠点は全く枚挙にいとまがないといつていいが、しかしこれを責めるわけではない。編修費がふんだんにあれば、この種のものがよりよいものになることはわかりきっている。その杜撰さを責めるまえに、乏しい金で比較的短日月の間に、こういう便利なものをつくったことに敬意を表したい。そして国家か、個人の、もしくは総合の研究に金を出すのはもとより結構であるが、このような縁の下の力もち的な事業にこそ、大いに援助を与えるべきだと思う。なお巻末には当研究委員会と東大中哲文研究室の神谷山口文庫の蔵書目録が附録されている。

① 東京都立大学人文学部中国文学研究室編茅盾評論集 第一集

1957 244頁 附録38頁 25cm 謄写印刷

(2407)

茅盾の作家的業績は「子夜」はじめ多くの作品によつてよく知られ、作品集も日本で比較的容易に入手できるが、創作活動とならんで彼の仕事の有力な一面をなす評論活動の方は、従来中国でも出版されたものが非常に少なく、通観するのに不便であつた。そこで、都立大学・中国文学研究室の竹内好・松井博光氏らが中心になつて、茅盾の評論を集めて、重要なものから逐次謄写印刷にして関係研究者に頒つことにした。本書はその第一集で、別冊附録に茅盾評論目録(未定稿)がある。

② 高橋勇治：中国人民革命の研究

東京 弘文堂 昭和32年 304頁 22cm

(東京大学社会科学研究所研究叢書第12冊)

(2405)

終戦以来12年間に発表した中国現代史にかんする論文のなかから、人民革命についての主要な論文9をえらんで収録する。第1・2章は、旧いタイプのブルジョア民主主義革命から新民主主義革命への発展の必然性を、清末から五四運動前後にいたるまでの文化革命運動(反封建文化運動)の歴史と、民族解放運動の分析を通じて論証しようとしたもの。第3章以下は、



中華人民共和国の本質を理解するために書いたもので、新民主主義革命から社会主義革命への成長転化、中華人民共和国成立以来の革命的変革と建設の内容、中華人民共和国の本質、その政治制度などの問題を主要な内容としている。著者は東京大学教授、社会科学研究所勤務。

9 加地信：中国留用十年

岩波新書 昭和32年 212頁

終戦後10年といえば中国にとっては大きな変革期であるが、その時期に中共の内部において、その改革事業の進展を実見することができたという、日本人としては貴重な体験をあらわしたのが本書である。

著者は1953年に渡満、終戦までの10年間をベスト・コレラ等の伝染病防疫の仕事にたずさわってきた。終戦後、満州一東北地方には、国民党、ソ連軍が入替わり入ってきているが、終始医療の技術者として、仕事の上での協力を続けてきた。従つてこの地方に1946年になつて中共軍が現われた際も同様な立場でこれに接している。ふとしたきっかけから中共軍の衛生部勤務のままに帰国が延期され、1955年2月まで、中国留用10年の生活を送ることになったわけである。

本書に扱われているのは、著者の、主に東北地方を背景とした、防疫という仕事の場から眺めた中国変革10年の有様ではあるが「技術者として、インテリの端くれとして、中共の政策を批判的に見ていこう」とする態度が、中国で行われつつあつたことをかなり広範囲に、また鋭く眺めわたさせている。「いかにして民心をとらえるか」「機械的平等から正しい平等へ」「三反五反運動」などの章では中共の指導者達が、どのようにして民心をとらえ、これを指導していつたか、けつして上からの強制ではなく、民衆自身の意識の発展としてこれを導いていく方法が著者自身の驚きの目をもつて興味深く示されている。また著者の防疫という仕事の立場から中国の医学、医学教育の実際にもふれ、いわゆる「今の中国にはハエがいなくなつた」という話についても、それが「愛国衛生運動」として大規模に行われ、実現したものだという。

急激な変革には無理がともなうのは当然である。反革命とせめられるものも多い現状である。著者は高級技術者として優遇されてはいたが、無批判に中共に追随していくものではなかつた。しかし技術者として、自分の腕が存分に振えること、自分の仕事が思うようにやれること、これぐらい大きな自由はないと思う、と中国の変革期をともに体験してきた留用生活の結論として最後に著者は語っている。

《 1957年度近代中国研究論文目録 》

〈 日本文 〉

1. 主として東洋文庫・東方学会にある雑誌、紀要により作りました。
2. 近代とはおよそアヘン戦争以後をさしています。清朝全般に関する論文も載録しました。
3. 排列はおおむね時代順にしましたが、時代順にするといつてもそれは必ずかしいので、便宜的な排列といった方がいいかも知れません。

佐伯 富 清代塩の専売制度について

歴史教育 5-11・12

天野元之助 清代の農業とその構造

アジア研究 3-1・2

森田 明 救生船について—清代における社会事業の一齣— 史学研究 66

内藤 昭 旧中国の対外貿易—その特質をめぐって 中国研究 9

迫田 稔夫 林則徐における禁烟思想の発展について 鹿大史学 5

島崎 昌 林則徐とカーレーズ灌溉法

中央大学文学部紀要 9

大隅 逸郎 太平天国

同志社法学 8-4

坂野 正高 天津条約(1858)調印後における清国外政機構の動揺—欽差大臣の上海移

駐から米国公使ウオードの入京まで—国際法外交雑誌 55-6・56-1

大谷孝太郎 曾国藩論

彦根論叢 34

魚返 善雄(解説)同治末年留燕日記(上)

東京女子大学論集 8-1

安岡 昭男 琉球所屬を繞る日清交渉の諸問題

法政史学 9

- 野村 浩一 清本公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義(1) 国家学会雑誌 71-7
- 田中 直吉 朝鮮をめぐる国際葛藤の一幕—京城甲午の変— 法学志林 55-2
- 田中 直吉 日鮮関係の一断面 国際政治 1957 秋季
- 小野 信爾 李鴻章の登場 東洋史研究 16-2
- 河村 一夫 李鴻章について  
歴史教育 5-1・2・3
- 北山 康夫 戊戌変法をめぐる政治的諸情勢について  
東洋史研究 15-3
- 大隅 逸郎 戊戌百日維新  
同志社大学人文科学研究所紀要 創刊号
- 菊池 貴晴 不纏足運動について—変法の背景として  
歴史教育 5-12
- 小野川秀美 譚嗣同の変革論—その形成過程  
東方学報 27
- 佐藤 震二 張之洞の変法思想  
アカデミア 17
- 増 田 涉 嚴復について(覚書)—文学史的にみて  
人文研究 8-7
- 河村 一夫 清末官僚の保守性  
アジア研究 3-4・4-1
- 河村 一夫 北清事変と日本 国際政治 1957 秋季
- 内藤 戊申 内藤湖南記「游清第三記」 東洋史研究 16-1.2
- 内藤 潮邦 内蒙古に於ける拳匪の擾乱と蒙地の開放—基督教会の大土地支配—  
立正史学 20
- 大島 利一 秋瑾女俠の生涯  
寧楽史苑 4
- 永井 算巳 光緒末年に於ける留日学生界の趨勢  
歴史学研究 206
- 波多野善大 日露戦争後における国際関係の動因 国際政治 1957 秋季
- 菊池 貴晴 第二辰丸事件の経過と背景について—対日ボイコット研究の一節— 福島学  
芸学部論集 8-1

- 波多野善大 清末における鉄道国有政策の背景 名古屋大学文学部研究論集 史学6
- 永井 昇巳 江浙路事と清末の民衆  
信州大学文理学部紀要 7
- 清水 善汎 中国に於ける鉄道利権に関する一考察  
明大商学論叢 40-1
- 臼井 勝美 日本と辛亥革命—その一側面  
歴史学研究 207
- 堀川 武夫 二十一箇条要求に関する若干の考察 (1)  
国際法外交雑誌 56-3
- 曾村 保信 袁世凱帝政問題と日本の外交  
国際法外交雑誌 56-2
- 竹内 好 孫文の問題点  
思想 1957-6
- 野村 浩一 孫文の民族主義と大陸浪人—世界主義・民族主義・大アジア主義の関連について—  
思想 1957-6
- 野原 四郎 民本主義者の孫文像  
思想 1957-6
- 野沢 豊 戦争の中の孫文像  
思想 1957-6
- 新島 淳良 日本左翼の孫文理解  
思想 1957-6
- 安藤彦太郎 孫文思想の形成と継承  
思想 1957-6
- 野沢 豊 新聞に描かれた孫文  
思想 1957-6
- 野沢 豊 日本における孫文関係文献目録  
思想 1957-6
- 安藤彦太郎 孫文年譜  
思想 1957-6
- 伊藤 敬一 魯迅について



- 人文学報 16  
猪俣 庄八 魯迅伝覚書—日本留学時代を中心にして  
北海道大学文学部紀要 6  
志賀 正年 魯迅翻訳研究  
天理大学学報 22・24  
大山 正春 魯迅「一件小事」について  
明治学院論叢 45  
北山 康夫 魯迅と人間改造の問題  
中国研究 5  
義我壮一郎 魯迅と現代—過渡的な覚え書 そのⅡ 中国研究 5  
中川 登史 会読「孔乙己」をめぐって  
中国研究 5  
エリ・バズドネーエフ著・川上久寿訳 魯迅の社会評論  
中国研究 5・6  
桑山 龍平 小説史略について  
中国研究 5  
香坂 順一 魯迅の語文 (二)  
中国研究 5  
相 浦 泉 魯人の思想の展開—進化論とその消滅  
中国研究 6  
志賀 正年 魯迅翻訳論考—その性格について  
中国研究 6  
伊地智善継 「一件小事」を会読して  
中国研究 6  
高 田 淳 魯迅の維新派批評—中国の近代思想の一側面—  
中国研究 7  
金子 二郎 阿Q正伝そのほか—会読会報告から  
中国研究 7  
大 芝 孝 韓長経〔学習魯迅〕を読んで  
中国研究 7

- 義我壯一郎 魯迅の限界  
 中国研究 8
- 中川 登史 「野草」について—一つのみかた  
 中国研究 8
- 金子 二郎 祝儀そのほか—婦人の問題  
 中国研究 8
- 伊藤 秀一 魯迅の歴史認識について—視覚設定のためのノート  
 中国研究 9
- 藤井栄三郎 「石鏡」そのほか  
 中国研究 9
- 太 田 進 「華蓋集」をめぐって  
 中国研究 9
- 相 浦 泉 魯迅の論戦—現代評論紙との論戦—そして三・一八事件  
 中国研究 10
- 中川 登史 女師大事件をめぐって—魯迅と陳西  
 中国研究 10
- エリ・バーズドナーエフ著・川上久寿訳 追憶と改革新編  
 中国研究 10
- 里井彦七郎 李大釗の出発—「言治」期の政論を中心に— 史林 40-3
- 松崎 治之 境遇に敗北した詩僧について—蘇曼殊  
 中国文芸座談会ノート 10
- 伊藤 秀一 胡適の思想について—「五四」文化革命の一考察  
 中国研究 7
- 木島 廉之 胡適の文芸思潮  
 中国文芸座談会ノート 10
- 中村 忠行 「春柳社」逸史稿—歐陽予倩先生に捧ぐ  
 天理大学学報 22・23
- 川木 邦衛 新青年と青年雑誌—上—  
 北斗 2-6
- 天野元之助 新文化啓蒙運動



- 中国研究 7  
内野熊一郎 民国初・中期の経学観
- 日本中国学会報 9  
天野元之助 民族資本の興隆
- 中国研究 6  
石川 忠雄 ロバート・C・ノース氏による張国燾回顧談記録—中国共産党史研究の一資料  
法学研究 30—11
- 臼井 勝美 五・三十事件と日本
- アジア研究 4—2  
藤井 高美 武漢政府時代における国共関係  
法学論叢 62—6
- 島田 俊彦 上海越界道路問題をめぐる国際紛争(1932~1937)—1— 武蔵大学  
論集 4—2
- 秦 郁彦 梅津・何応欽協定経緯  
アジア研究 4—2
- 清水節郎手記・秦郁彦編 芦溝橋事件—七月七日夜から八日夜まで—アジア研究 3—4
- 大 柴 衛 太平洋戦争中在支那人学校状況  
姫路工業大学研究報告(一般教育関係) 6
- 古島 和雄 抗日時期の中共の土地政策  
東洋文化研究所紀要 10
- 古島 和雄 中国の土地改革と富農問題  
社会科学研究 9—1
- 久重福三郎 中共の市場自由化について  
神戸外大論叢 7—5
- 笠原 正明 中共の少数民族政策  
神戸外大論叢 7—5
- 入矢 義高 「百家争鳴」その後  
中国文学報 6
- 宮下 忠雄 中共国家財政収支の回顧と展望  
アジア研究 3—2

高橋 勇治 中国の国家資本主義と国家権力の問題－柳春生氏の批判に答えて－

アジア研究 3-2

江副 敏生 中共八全大会の報告を読んで 「第一次五ヶ年計画の歴史的背景」の補足

アジア研究 3-4

神谷 龍男 中ソ友好同盟条約の地位

アジア研究 3-4

入江啓四郎 日本と中華人民共和国の関係

アジア研究 4-1

松崎雄二郎 中共の経済建設

アジア研究 4-1

能勢 寅造 最近の中ソ関係－政治及びイデオロギー－関係を中心として－

アジア研究 4-2

小島 晋治 中国の歴史教育

歴史教育 5-9

多賀秋五郎 中華人民共和国の歴史教育

歴史教育 5-9

松井 武男 中共の新文字と漢字教育

斯文 18

波多野太郎 矛盾論の展開と整風運動の発展について－文学史研究の立場から－

横浜大学論議 9-1

今村与志雄 趙樹理文学覚書

人文学報 16

大 芝 孝 新中国戯曲の主題

神戸外大論議 7-5

### < 中国文 >

1. 東洋文庫にある雑誌だけで作りました。「近代史資料」は研究論文集とはいえないので省きました。
2. 近代とはおよそアヘン戦争以後をさしています。ただし、1949年の人民共



和国成立後は、取捨に迷いましたので、省きました。

3 排列はおおむね時代順にしましたが、時代順にするといつてもそれはむずかしいので、便宜的な排列といった方がいいかも知れません。

孫 思 白 為什麼中国現代史的研究至今這般寥落？

新華半月刊 1957-3

魯 江 对“中国通史半殖民地半封建社会時代（下）教学大綱（初稿）”的一些意見

教学与研究 1957-6

吳 微 心 評“中国歴史概要”内“近代中国”部分

歴史研究 1957-8

中国近代史分期問題的討論（来稿摘要）

歴史研究 1957-3

榮 孟 源 建議編撰辛亥革命以来的歴史資料

新建設 1957-7

蔡 美 彪 榮孟源的反動的史学“建議”的剖析

新建設 1957-10

謝 菊 曾 談談帝國主義对中国經濟侵略的史料搜集問題

新華半月刊 1957-5

陳 恭 祿 介紹中国近代史的幾種基本史料

歴史教学 1957-6

舒 新 城 中国近代史資料簡介

學術月刊 1957-1~7

陳 象 恭 談清実録和清史稿

歴史研究 1957-1

餘 元 安 中俄两国人民友好關係三百年

歴史研究 1957-11

A · H 布洛依娜（蘇）中蘇關係史上的新文獻

歴史教学 1957-12

彭 沢 益 清代広東洋行制度的起源

歴史研究 1957-1

- 陳 德 昌 对百年前上海是一片荒凉漁村說法的疑義  
歷史研究 1957-1
- 陳 仏 松 "昇平社学"之初步研究  
歷史教学 1957-1
- 梁 任 葆 金田起義前广西的農民起義  
歷史教学 1957-10
- 梁 任 葆 对束著"洪秀全"一書的意見  
歷史研究 1957-1
- 景 珩 關於太平天国史事的研究問題〔对羅爾綱先生一些研究方法的商榷〕  
學術月刊 1957-9
- 朱 子 爽 "雙林鎮志"中的"兵燹記"(史料)  
歷史研究 1957-6
- 劉 永 長 介紹太平天国門牌的新史料  
歷史研究 1957-10
- 王崇武訳注 英國侵略者破壞太平天国革命的一段史料  
歷史教学 1957-4
- 王 二 關於"咸豐十年庚申大乱記"(史料)  
歷史研究 1957-3
- 郭 毅 生 略論太平天国革命的性質  
教学与研究 1957-2
- 劉 佐 泉 關於太平天国革命特点的形成問題  
歷史研究 1957-3
- 賈 熟 村 太平天国革命的性質問題  
歷史研究 1957-8
- 袁 定 中 關於太平天国革命的性質問題  
歷史研究 1957-8
- 金 毓 黻 關於忠王李秀成自伝原稿真偽問題的再商榷  
歷史研究 1957-1
- 丁 雲 青 忠王李秀成自伝原稿是曾國藩等所偽造的麼  
文史哲 1957-3·4



- 景 珩 關於李秀成自傳真偽問題的商討  
新華半月刊 1957-3
- 年子敏·東世徵 關於“忠王自傳原稿”真偽問題的商榷  
新華半月刊 1957-3
- 孫 觀 折 關於李秀成自傳原稿的真偽問題  
歷史研究 1957-4
- 鄭 鶴 聲 忠王李秀成自傳真偽問題商榷  
文史哲 1957-4
- 蔡 起 賢 太平天國北征將領林鳳祥  
歷史研究 1957-4
- 梁 任 葆 石達開迴師廣西的鬥爭及其和大成國的關係  
歷史研究 1957-9
- 彭 沢 益 關於洪大全的歷史問題  
歷史研究 1957-9
- 苑 書 義 試談太平天國領導集團的分裂  
歷史研究 1957-2
- 潘 抱 存 略論太平天國領導集團的内訌  
文史哲 1957-5
- 鄒 純 略論太平天國的田賦制度  
文史哲 1957-5
- 金冲及·胡繩武 關於天朝田賦制度的實質問題〔兼評郭毅生“略論太平天國革命的性質”一文  
的若干論點〕 學術月刊 1957-9
- 梁 任 葆 太平天國和礦工  
歷史教學 1957-5
- 景 珩 湘軍—太平天國革命時期的反動地主武裝  
歷史教學 1957-9
- 吳 良 祚 關於“天父詩”  
歷史研究 1957-9
- 羅 爾 綱 關於太平天國壁畫不准繪人物的問題  
文史哲 1957-11



- 陸景琪 試論清代厘金制度  
文史哲 1957-2
- 梁任葆 太平天国和上海小刀會關係的商榷  
歷史教學 1957-2
- 江地 阿古柏運動的性質  
文史哲 1957-7
- 馬汝珩 試論阿古柏政權的建立及其反動的本質  
歷史教學 1957-8
- 王文才等 對於李藍起義某些問題的商榷  
歷史研究 1957-10
- 黃景賢 記曾文正公文鈔郭嵩燾氏批校本  
大陸雜誌 16-6
- 劉澐 十九世紀七八十年代南昌杭州兩個城市錫箔業中的資本主義關係  
史學集刊 1957-1
- 張振驤 介紹“中國海關與中法戰爭”  
歷史研究 1957-9
- 敵啓祥 中日甲午戰爭前中日在朝鮮的矛盾和鬥爭(1884-1894)  
史學集刊 1957-1
- 郭毅生·湯池安 論甲午黃海大戰與中國北洋海軍  
文史哲 1957-6
- 郭濟 黃海大戰中北洋艦隊的隊形是否正確  
文史哲 1957-10
- 友蘭 十九世紀末至二十世紀初官田向民田的轉化  
經濟研究 1957-2
- 谷書堂 十九世紀末二十世紀初資本主義發展不平衡  
歷史教學 1957-1
- 徐棻生 從甲午戰爭到辛亥革命時期清政府的外債  
經濟研究 1957-4·5·6
- 王可風 辛亥革命前封建主義和帝國主義統治下的我國礦山  
學術月刊 1957-10·11·12

- 黃廷桂 1895—1900年帝國主義瓜分中國的鬥爭和美國的“門戶開放”政策  
歷史教學 1957—6
- 何若鈞 資產階級各派系在義和團運動期間的態度和活動  
歷史教學 1957—9
- 黃鉄源 1907—1908年間江浙人民反對蘇省鐵路借款的鬥爭  
史學集刊 1957—1
- 來新夏 試論清光緒末年的廣西人民大起義  
歷史研究 1957—11
- 李時岳 辛亥革命前後的中国工人運動和中華民國工黨  
史學集刊 1957—1
- 陳建中 四川巴中發現的革命文獻及石刻  
文物參攷資料 1957—8
- 房兆楹 關於周福清史料  
大陸雜誌 15—12
- 王炳義 鄭觀應的改良主義思想  
歷史教學 1957—10
- 黃鳴岐 黃遵憲詩歌中的民歌風格  
文史哲 1957—6
- 蕭公權 翁同龢與戊戌維新  
清華學報 新1卷—2
- 李沢厚 論康有為的哲學思想  
哲學研究 1957—1
- 湯志鈞 關於康有為的“大同書”  
文史哲 1957—1
- 李沢厚 “大同書”的評價問題與寫作年代  
文史哲 1957—9
- 張玉田 關於“大同書”的寫作過程及其內容發展變化的探討  
文史哲 1957—9
- 李沢厚 關於譚嗣同哲學思想的研究——對孫長江先生兩篇文章的一些意見  
哲學研究 1957—3



- 孫長江 關於譚嗣同哲學思想研究的幾個問題—再和李沢厚同志商榷  
教學與研究 1957-10
- 胡 焜 戊戌政變至辛亥革命期間的梁啓超 新建設 1957-4
- 胡 焜 論梁啓超的史學 文史哲 1957-4
- 王介平 論敲復  
教學與研究 1957-12
- 丁則良 章炳麟與印度民族解放鬥爭  
歷史研究 1957-1
- 任訪秋 章太炎的學術思想與革命精神  
新建設 1957-2
- 陳錫祺 同盟會成立前孫中山的革命思想與革命活動  
中山大學學報(社會科學版) 1957-1
- 鄧初民 孫中山先生在中國近代史上的地位—紀念孫中山先生逝世卅二周年  
歷史教學 1957-3
- 尹 廣 瑤 試談孫中山的土地綱領  
歷史教學 1957-3
- 楊 正 典 孫中山先生的哲學思想  
教學與研究 1957-1
- 張 磊 論孫中山的民族主義  
北京大學學報(人文科學) 1957-4
- 陳 盛 清 論孫中山的“五權憲法”思想  
學術月刊 1957-9
- 丁則良 孫中山與亞洲民族解放鬥爭  
東北人民大學「人文科學學報」 1957-1
- 侯 外 廬 孫中山的哲學思想及其同政治思想的聯繫  
歷史研究 1957-2
- 張 若 達 批判梁漱溟的思想方法  
新建設 1957-2
- 丁 景 唐 瞿秋白筆名、別名集錄  
學術月刊 1957-8·9

- 劉 洋 溪 瞿秋白論文學發展過程  
文史哲 1957-7
- 李 龍 牧 李大釗同志和五四時期馬克思主義思想的宣傳  
歷史研究 1957-5
- 文 操 試編李大釗(守常)遺著繫年目錄  
學術月刊 1957-1~6
- 文 操 試編李大釗(守常)遺著繫年目錄補正  
學術月刊 1957-7
- 文 操 試編李大釗(守常)遺著繫年目錄再補  
學術月刊 1957-9
- 朱 彤 魯迅的抒情語言 文史哲 1957-5
- 曹 未 風 魯迅先生和外國文學 學術月刊 1957-1
- 陳 鳴 樹 魯迅與祥倫 文史哲 1957-9
- 以 群 論魯迅前期文藝思想的發展 學術月刊 1957-4
- 胡 冰 論“魯迅日記”的思想藝術價值  
文史哲 1957-11
- 馮 文 炳 “阿Q”正傳  
東北人民大學「人文科學學報」1957-2·3合刊
- 鄒 義 魯迅的哲學觀點  
哲學研究 1957-5
- 林 鶯 魯迅論民間文學  
廈門大學學報 1957-1
- 關 鋒 徐懋庸的反動哲學  
哲學研究 1957-6
- 陳 慧 生 十月革命對中國先進分子的影響  
歷史研究 1957-11
- 丁 守 和 等 十月革命對中國革命的影響  
歷史研究 1957-10
- 劉 埜 關於“新時代”和湖南自修大學  
歷史研究 1957-7



- 顧 林 第一次国内革命战争时期的“关税会议”与“法权会议”  
 历史教学 1957-4
- 彭明·桑威之 “三一八”惨案始末  
 历史教学 1957-2
- 廖 璋 英日美等帝国主义在我国北伐战争中不同的阴谋——对“第一次国内革命战争时期帝国主义对中国革命的干涉”一文的一些意见——  
 历史教学 1957-6
- 張 磊 略論蒙古一九二一年的革命運動  
 历史研究 1957-3
- 張 如 心 論共产党的群众路線  
 哲学研究 1957-3
- 江西吉安高中历史教研组 記1930年九月中国工农红军解放吉安城  
 历史教学 1957-12
- 金 心 熙 從“四·一二”到“九·一八”的工人運動  
 中山大学学报(社会科学版) 1957-2
- 譚 雙 泉 第二次国内革命战争时期的土地鬥争路線  
 历史教学 1957-7
- 文 琪 第二次国内革命战争时期中国共产党党報和進步報刊簡介(資料)  
 历史教学 1957-12
- 何 震 二十年前的蘆溝橋事變  
 历史教学 1957-7
- 陳 達 上海工人的生活費(1929—1948)  
 教学与研究 1957-5
- 陳 達 上海工人的工資与实在收入(1930—1946)  
 教学与研究 1957-4
- 陳 達 上海的劳資爭議与罷工(1937—1947)  
 教学与研究 1957-6
- 藍 天 照 帝国主义“在華投資”探奧 學術月刊 1957-7
- 輝 南 反帝反封建的革命火焰 文物參攷資料 1957-1
- 唐 垂 裕 從烟業看帝国主义对華的經濟侵略 历史教学 1957-12



《 文献解題 》

周延初 周夢坡（慶雲）先生年譜

民国23年刊

周慶雲（1847-1926）、字は景星、また逢吉。号は湘舫、別号は夢坡。昌大の三子。浙江吳興縣南潯鎮の巨商。延初はその子。周氏の祖は周文魁。原籍は余姚県。商業を営み、乾隆年間南潯に移住、吳興籍となる。清末に至り、昌福・昌大・昌熾・昌富らの出するに及び、南潯の巨商、龐元濟・元澂・張宝善・邱炳華・祁頌声・劉鑑等と併び称せられる有力商人となる。これら諸家の子弟は先ず官途に就くを第一とし、正途によるか、然らずんば捐納により官界に出た者が頗る多い。周氏もこの例に洩れず、昌大の長子慶賢は挙人、江蘇補用知県、次子慶森は附貢生より捐納により平湯、泰順県教諭、三子慶雲は光緒11年（1885）より20年（31才）まで省試に應ずること6回、遂に及第せず、以後専ら商業に従事するに至ったものである。これより先、慶雲は父昌大の弟昌熾の嗣となり、光緒9年より生糸取引及び製糸業に従事、光緒17年、岱山に赴き塩業に従事、光緒31年、嘉所甲商（浙塩の4分の1を独占する商人）となつてからは、浙江商業界に重きをなし、宣統以後政治にも関与するに至った。「塩法通志」100巻の著がある。

所で、本年譜は周慶雲の事蹟のみならず、昌大・昌熾らの営業についても頗る興味ある記載に富み、湖糸取引の一大中心たる南潯鎮の糸業の状態を窺うに貴重な資料である。また中国においては、官僚以外の人々の年譜に乏しい点を考えても、本書は珍重すべきものといえるであろう。なお本年譜に附せられている誄・墓表・墓誌銘等には、蔣介石・王兆銘・于右仁・陳其美・繆荃孫・章炳麟その他知名の士の名が多数列んでいる。慶雲の政財界における地位を或る程度示していると思われる。（佐々木正哉）

曾紀芬 崇徳老人八十自訂年譜

民国22年刊（II-10-C-7）

曾紀芬は曾國藩の末女、光緒元年（24才）聶緝規に嫁す。本年譜は、咸豊2年（1852）即ち紀芬の生年より始まり、民国9年（1920）までにわたっている。女性の年譜として珍らしいばかりでなく、曾國藩の公私の生活、兄姉の生活状態、夫である聶緝規の公務上の諸事件、子其杰・其輝の紡織業への進出（湯寿潜と共同）等のほか、家計の状態に至るまでかなり

詳かに記されている。蔡錫棧は湖南省衡山県の人。正途出身ではなく、捐納と、曾國荃・左宗棠等の保奏によつて上海製造局会弁・蘇松太道・浙江按察使・江蘇布政使・安徽巡撫などの優欠を歴任、其杰・其煒は父の財力を基にして財界に進出するに至つたものである。其杰は民国9年、上海總商会会長に公挙されている。要するに本年譜は一般の年譜の型にとられず、公私併せて要点を記しており、清末官界の内情、官僚の私的経済などを知るために面白い資料であろう。（佐々木正哉）

蔡錫 蔡松坡先生遺集

民国82年 12冊 線装

蔡錫（1882-1916）原名は良寅、字は松坡、湖南宝慶（邵陽県）の人。自作農出身。13才にして王先謙門下の樊鍾に学び、光緒21年（1895）督学江標の選により県学生、24年（17才）督学徐仁鏞の薦により長沙時務学堂に入り、梁啓超に師事、同年8月学堂解散せるも、終生梁を師と仰ぎ、爾後の政治活動に於いて常に梁との関係最も密接。25年、梁の招きにより渡日、一旦帰国するも再び渡日、士官学校に学び、30年7月帰国、江西・湖南・広西・雲南の新軍練成に従事、宣統3年（30才）武昌に革命起るや、直ちに所部を率いて雲南独立を達成し都督となる。民国2年（1913）北京に出て袁政府に入り閑職につくも、袁の帝制運動起るや忽ち雲南に帰り李烈鈞・唐繼堯らと護国軍を組織、力戦よく袁を挫折せしめ、民国史上赫赫たる声威を輝かす。然るに護国の役に健康を害すること甚しく、渡日療養せるも、民国5年、35才を以つて客死。

本遺集の集首（1冊）は年譜であるが、64葉中の実に40余葉は民国4・5年間の倒袁運動に関するものである。更に遺集4、軍政文電（1冊）及び遺集8、雜著（1冊、文告、演説誓詞、函札、序跋、碑銘）には辛亥革命当時及び護国の役当時の政治、軍事関係文書が収められている。これらには梁啓超宛の文書が特に多い。

遺集1は「曾胡治參謀録」2巻である。本書は曾國藩・胡林翼の軍事に関する言論を分類整理したもので、宣統3年6月、昆明にて脱稿、遺集には民国13年の蔣介石の序と民国6年の梁啓超の序が附せられている。初版が何年であるかは不明。本書冒頭の蔣の序文には、先ず

太平天国之戦争、為十九世紀東方第一之大戰、太平天国之歴史、為十九世紀東方第一光榮之歴史、而其政治組織、与經濟設施、則尤足称焉、余自幼習聞鄉里父老所談、已心嚮往之、吾党總理、又常為講授太平天国之戰略戰術、及其名將李秀成石達開等治兵安民之方略、乃益識其典章制度之可儀

と云い、頗る太平天国を礼讃するが如くであるが、一方ではまた

民国二年失敗以後、再將曾氏之書与胡左諸集、悉心討究、不禁而嘆胡曾之才略識見、与左李之志氣節操、高出一世、實不愧為當時之名將、由是益知、其事業成敗必有所本也、夫滿清之所以中興、太平天国之所以失敗者、蓋非人才消長之故、而實德業隆替之徵也。

とのべ、結局、太平天国と曾胡等を等しく賞讃し、兩者共に研究に値することを主張するだけで、態度頗る曖昧である。当時における蔣介石の微妙な立場を察することが出来るように思われる。

遺集2は、「軍国民篇」1巻、遺集3は、「軍事計画」3巻で、何れも軍事に関するものであるが、第5集「中国歴代経界紀要」3巻は田賦に関するものである。蔡鏐は民国3年12月全国経界局督弁に任ぜられ、先ず土地調査の方針を定めるために専門家多数を集めて内外の田土調査、地租徴収制度を研究せしめ、民国4年7月、「中国歴代経界紀要」3巻及び「各国経界紀要」3巻(遺集6)の編纂を終り、これを基として「経界法規草案」3巻(遺集7)が編纂された。中国歴代経界紀要は古来よりの中国の賦役制度、土地大量法の変遷を概説したもので、よく整理されてはいるが、短期間に完成されたもの故、特に新しい研究等を含むものではない。中に、江蘇・福建両省について、具体的な土地調査の指針を示しているが、福建の部に次の一節がある。

#### 第六 業主

閩省土地、向有一地数主之弊、如閩海、建安道属之田面、田根、大苗、小苗、汀漳道属之田骨、田皮、大稅主、小稅主、佃戶等是、考其原因、要有二端、一由墾荒、墾復而生、我国向以奨励墾荒、開闢地利為政策、於是強有力者、紛紛領墾、因地多工鉅、每招租以分墾之、甚至有以開墾之費、歸佃戶自任者、故其佃戶与普通佃戶不同、对其所墾之土地、有处分之權、又有在冊之田、因乱後荒廢、空賠錢糧、而又力不能墾者、則使人代為墾復、此墾復之人、对其地亦有处分之權、此一地二主、由墾荒墾復而生之原因也、二由憚輸賦稅而生者、閩俗、有田地之人、往往憚輸賦稅、而潜割本戶錢糧、配租若干石、以賤價售之、使有租無田者(即壳主)完糧当差、己則坐食、田租与糧差概無所与、買者利其價賤、亦樂於承買、甚有佃戶以糞土銀之名、私相授受、而成一地三主者、此一地数主之第二原因也、其沿襲甚久、其關係甚繁、其流弊亦甚大、務須將各地實在情形徹底清查、以等補救之方、其調查標準如左、

として、十数項にわたって問題点をあげている。福建省の一地主慣行の発生原因につき参考となる。この調査が実際に行われたか否かは明かでないが、恐らく行われなかつたのではない

かと思われる。

なお蔡鏗の伝記には李旭「蔡松坡」(民国35年、南京青年出版社、102頁、青年模範双書)がある。本書は概ね前掲遺集中の資料を基にして書かれたものであるが、若干参考するに足る記述がある。

また蔡鏗が最も奮闘した護国軍については瘦恩陽「雲南首義擁護共和始末記」(民国6年、雲南図書館発行、432頁)がある。瘦恩陽は護国軍編成と共に、雲南都督府の軍政庁長として帷幄に参じ、倒袁後、功により陸軍中將に補せられた人。倒袁軍の作戦計画、軍事行動、対内対外交渉、軍事費に関する各種資料が刻明に収録されている。(佐々木正哉)

### 羅光 陸徵祥伝

香港真理学会出版 1949年 301頁(四六判)

陸徵祥(また増祥と称す)(1871-1949)、字は子興、また子欣。江蘇、上海の人。父はキリスト教徒、外人宣教師の助手として伝道に従事、徵祥は13才にして上海広方言館に入り習学8年(仏文専攻)、北京同文館に進み、1年にして駐俄徳奥荷四大国大使許景澄に抜擢されて駐俄大使館員となり、光緒19年(1893)より33年まで14年間ペテルブルグに在勤、33年(36才)駐荷公使に陞任、宣統3年(1911)駐俄公使、民国成立と共に唐紹儀内閣に入り民国初代の外交総長となる。以後外交総長、総理、或は外交顧問として絶えず外交問題の処理に参与。民国初めの内外共に多難を極めた時代に彼がよく外交界に重要な地位を保つことが出来たのは、その外交的手腕にもよるであろうが、また彼の温厚な人柄と党派に所属しなかつたことにもよるであろう。民国8年(1919)外交総長を以つてパリ平和会議に首席代表として出席、帰国後総長の職を辞し、以後遂に政界を引退、民国16年ベルギーに赴き、聖安德修道院に入り、民国35年、サン・ピエール修道院の名誉院長となり、38年(1949)没。やや変つた生涯を辿つた人である。

本書の著者の経歴は明らかでないが、キリスト教職にあり、陸徵祥の談話をはじめ、講演集を集めた "Souvenirs et Pensées" 及び「陸徵祥言論集」からの引用があり、これらには参考すべき記事がある。(佐々木正哉)

### 鳳岡及門弟子編 三水梁燕孫先生年譜

民国33年刊 2冊(1522)

本書はフーヴァー図書館の呉氏の書目にもありますが、民国初の重要資料として特にあげて

おきます。

梁士詒(1869-1933)、字は翼夫、号は燕孫、廣東三水県の人、光緒15年(21才)挙人、同20年進士、同29年經濟特科に志し、一等第一名、同年、唐紹儀(天津海關道)の升により北洋編書局総弁となり、袁世凱の幕下に就く。次年、全權大臣唐紹儀に従い印度に赴き西藏問題の交渉に当り、30年帰国、唐紹儀が外務部右侍郎兼督弁京漢・滬寧鐵路大臣となるや、鐵路総文案に任せられ、更に翌年、盛宣懷に代つて唐紹儀の鐵路総公司督弁となるや、唐を扶けて鐵路行政の実権を掌握し、一方交通銀行を設立して金融界をも牛耳るに至る。宣統3年、一旦盛宣懷によつて地位を追われたが、盛の鐵路国有政策の失敗により革命起るや袁世凱の下に参じて清帝退位交渉、南北和平交渉等に劃策する所多く、以後、袁總統の下で秘書長として、政治、經濟上に隠然たる勢力を揮い、袁の没後も能く声威を保持し、1921年には國務總理となる等、所謂交通系の領袖として政、財界に頗る重きをなしたことは周知の所。

本年譜は四六倍判 上巻469頁、下巻624頁に及ぶ大冊で、梁士詒の公私に亘る諸事件につき、公式文書・私信・談話・新聞記事等を豊富に引用し、細大もらさず詳記していることは勿論、全般的な政治の動き、財政、經濟等、苟しくも梁士詒の政治活動を理解するために必要な資料、或は解説が掲げられている。従つて本書は単に梁士詒の伝記としてのみならず、清末から民国22年に至るまでの一般政治、經濟、財政を理解するためにも甚だ有益である。但し、文中往々にして梁士詒の立場、進退を弁護することに傾る意を致しているが、この点は充分考慮に入れて読まらるべきである。(佐々木正哉)

遷庵年譜編印会編 葉遷庵先生年譜

民国35年 383頁 (シカゴ大学所蔵)

葉恭綽(1831-1945)字は裕甫、別字蒼虎、遷庵と号す。廣東番禺縣の人。梁士詒と共に交通系の重要人物。祖父は進士出身、軍機章京となり、父、佩璣は張曜(山東巡撫)の幕に従い、後挙人より候補知府となり、江西に赴き10余年間關稅業務に従事、恭綽は光緒24年(18才)府試に依じて「鐵路賦」を作り督学張百熙の賞讃を受く。26年郷試に依り落第、27年、京師大学堂に学び、28年、上海廣雅書局に入り編訳に従事。翌年湖北に赴き梁鼎芬の薦により、農業学堂教員となり、更に湖北方言学堂、西湖高等小学、西湖師範学堂等の教員を兼任、32年、郵伝部新設され張百熙尚書に任じ、唐紹儀、胡燏芬、左右侍郎となるや招かれて文案処総務股に入る。以後、殆んど鐵路行政に終始し、国民初において最も多く鐵路行政に係した人物である。従つて本年譜は民国初期の鐵路行政に就いては頗る詳細であり、

中国铁路史の好資料である。葉は鉄路以外の政治活動については梁士詒内閣の交通総長となつた時と、13年、孫文に附して段・張と聯合して曹・呉打倒を策し、段祺瑞内閣の交通総長となつた頃が政治活動の頂点であろう。14年、職を辞してからは専ら古史研究等の文化事業に従つた。なお本年譜中の一般政治情勢についての記事は梁年譜に比し頗る簡単で、中には明らかに梁年譜から引用したと思われる記事も少なくない。又本年譜と併せて一体と見做すべき選庵彙稿が刊行されている。本書は公牘・詩文・講演の3部に分れ、民国19年刊行、三百数十頁に及ぶものの様である。年譜中、随所に引用されているが、実物は所在を知らず。(W-G-24)

梁士詒・葉恭綽と最も関係深き唐紹儀の伝記は残念乍ら見出せず。(佐々木正哉)

衛聚賢 中国的幫会

重慶 説文社 民国36 370頁

著者衛氏、字は懷彬、1898年生、山西葛泉の人。山西省立商業専門学校、清華大学研究院を卒業、その後は各地の大学、研究所等に勤務、詳しくは橋川時雄「中国文化界人物総鑑」744頁参照。上の表題は目次に附せられているものですが、議院図書館のカードがこれを採用しているので、それに従つたものです。背には「幫(中国幫会青紅漢留)」とあり、表紙には

中国幫会  
青紅漢留

とあり、序文には「中国幫会改版序」とあります。

中国の秘密結社については、古くは平山周「中国秘密社会史」があり、その後も謝国楨「明清之際党社運動考」(民国23年)、また朱琳編「洪門志」(民国36年、中華書局、234頁)蕭一山「近代秘密社会史料」(Ⅱ-18-2)羅爾綱「天地会文献録」(272)等がありますが、前掲衛氏の書はその使用せる資料の豊富なる点に於いて類書の比でなく、特に民国以後の青幫・紅幫の内情について頗る詳細な点が大きな特徴です。もつとも、明末清初の東林党や復社については謝国楨の研究がすぐれています。

本書の第一編は幫会史。幫会すなわち秘密結社の起源は墨子にありとし、それより転じて漢代の遊俠となり、以後元代に至るまでの任俠につき説明し、明代においては東林党と復社とをあげている。康熙年間の幫会としては、東南堂・西北堂・三元堂・五福堂・四喜堂などの会派をあげ、何れも扶明滅清組織として特徴づけている。資料としては幫会に伝わる資料の外に、東華録その他文集などから上諭、奏摺などを良く引用して論証している。清初以後については天地会、青幫(揚子江及び運河の漕船労働者)、理門(白蓮教の一派)をあげている。民国以後については青幫及び紅幫を概観しているが、この両者は更に次篇でそれぞれ別個に詳細な研究が加えられている。即ち第二篇、紅幫では、名称(紅幫、洪幫、天地会、三点会、三合会、哥

老会、袍哥、社会、公口、公社、海皮、光棍、袍皮鬧、漢留、その他)組織、海底(結社の秘密文書)、開山設堂、对内規律、旗幟及び憑認、盤海底(江湖問答)等に分つて江幫関係の文書を駆使して詳論している。なお資料として挙げられているものは次の如し。

- 「漢留海底」石印本、1冊、(康熙元年編、羅爾綱「天地会文献録」鉛印本、1冊、民国33年、正中書局(272)とあるも、仮託)。
- 平用周「中国秘密社会史」
- 蕭一山「近代秘密社会史料」4冊(Ⅱ-18-2)
- 劉師培「漢留史」1冊、民国35年、
- 「中国秘密幫会概況」鉛印本、1冊、民国27年、憲政雜誌社刊。
- 「中国秘密幫会之研究」鉛印本、1冊、同上。
- 施劉格「天地会研究」薛澄清訳、民29、商務印書館。
- 李子峯「海底」鉛印、1厚冊、民国29年、上海。
- 羅爾綱「天地会文献録」鉛印本、1冊、民国33年、正中書局(272)
- 「広益公社社規綱要」石印本、1冊、民国34年、廖少樵印。
- 「袍哥内幕」鉛印本、1簿冊、民国35年、重慶民間報社印。
- 「漢留問答」鉛印本、1簿冊、民国35年、重慶五洲印刷所。
- (以下出版年月不明の木刻本)
- 「江湖海底」2冊。
- 「江湖問答」1冊。
- 「江湖応用新海底」2冊。

第三編、青幫は、名称(羅教、安慶、安清、三番子、清幫、安幫、青幫、家礼、臨濟道、安青)、字派(文字による世代の区別)、幫規、小香堂、大香堂、家廟、船、運河、船幫及び旗幟等につき詳述している。第三篇に掲げる資料は次の如し。

- 「清門考源」民国22年、初版、35年3版、鉛印、230頁
- 「清典正誼録」46頁
- 「道德全書」民国22年、92頁
- 「万道義心」鉛印、42頁
- 「学道須知」民国25年、104頁
- 「民族精神統統」民国35年、93頁
- 「中国秘密幫会概況」民国27年
- 「青幫実録」民国35年、新生文化社出版、17頁
- 「中国秘密幫会之研究」民国27年
- 「青幫内幕」民国36年、民間出版社、18頁
- 「臨濟道伝」民国28年、54頁
- 「万衆一心」民国35年、30頁
- 「安清源流」民国19年、150頁
- 「青幫通漕匯海」民国30年、北平出版、鉛印、兩大厚冊、約370頁
- 「民族精神」民国30年、105頁
- 「進家手冊」民国36年、187頁
- 「清典鈞玄録」民国32年、105頁
- 「通漕精華輯要」77頁。



なお、本書中、清代幫会の暴動、清末、孫文一派と幫会との聯携等につき一応ふれてはいるが、青幫、紅幫等が社会勢力として如何なる機能を果していたかについては具体的に究明されてはいない。むしろ煩雑な幫規、礼式等の説明が大部分である。秘密結社の革命運動については劉聯珂「中国幫会三百年革命史」民国29年、香港(?)216頁(フーヴァー図書館蔵)もあるも未見。また海外にある結社の革命運動については、台山七三老人黄三徳述「洪門革命史」民国25年、55頁(ハワイ出版?)なる小冊子があります。黄三徳はハワイの致公堂の領袖(光緒23年、34才の時より)。光緒29年、孫文がハワイにおいて洪門に加入してより、ハワイその他在米致公堂の孫文に対する経済的援助、著者黄三徳の劃策等をのべている。文中「孫文之臨時總統由洪門造成」の章などもあり、致公堂の革命達成に致した功績を頗る誇示している。さきに朱珉篇「洪門志」をあげましたが、本書は先ず幫会概論を掲げ、更に幫会の歴史、宗考、歴代山堂会社考、組織、綱要等を簡単にのべ、会内の文書、旗幟、隠語、暗号、各種儀式等につき詳述しています。但し、幫会の社会活動等については殆んどふれる所がありません。むしろ施劉格「天地会研究」の方が面白いと思います。(佐々木正哉)

#### 衛聚賢 江湖話

重慶説文社 民国38年 7版 213頁 (四六判の半分の大きさ)(原題衛大法師)。

本書は衛聚賢(衛大法師)が幫会の大姉兄につき、問答、隠語、作法等を聞き、それを一書にまとめたもの。内容は、江湖問答(甲、漢留問答、乙、天地会問答、丙、益路問答、丁、家礼問答)、江湖隠語(各地通行、青幫隠語等)、江湖行動(各種作法)等に分かれています。但し問答を羅列したのみで、何の説明もないので、一寸読んだだけでは問答の意味をよく理解することは困難です。隠語はまた極めて煩雑です。問答、隠語、作法等は、先掲の朱琳及びシユレーゲルの書にもありますが、本書が最も豊富に網羅しています。難解ではありますが、幫会研究には重要な資料と思われる。

衛氏はこのほかにも著書頗る多く、主なものをあげると、「中国考古小史」民国22年、上海商務印書館、111頁、「中国考古学史」民国26年、上海商務印書館、「中国各党派現状」重慶説文社、民国35年、「反共雜録」香港、民国41年、63頁、「古銭」民国31年(目次1.中国貨幣演変述略、2.古泉学綱要、3.古銭年号索引)、「古銭年号索引」民国31年、桂林中央銀行経済研究処、204頁、「古今貨幣」民国33年、重慶説文社、「古史研究」第1集、民国17年、上海新月書店、260頁、第2集、民国23年、上海商務印書館、「吳越



文化論叢』民国26年、上海江蘇研究社、388頁。(以上、議院図書館のユニオン・カタログによる)等があります。(佐々木正哉)

《資料紹介》

日本政府の「民報」発行停止命令に対する章炳麟の反駁

中国革命同盟会の機関紙である「民報」は1905年10月から東京で発刊された。毎月1冊発行されるという風に、定期的にはいかなかつたけれども、とに角、1908年10月には第24号を出すことができた。しかし間もなく日本政府から発行停止を命ぜられた。当時その編輯兼発行人は章炳麟であつたが、日本政府から停止の命令を通達されると、これに憤激して、直ちに内務大臣中田東助あて抗議文を提出した。次にかかげるのが、その内務大臣宛書翰であつて、章炳麟の文集である「太炎文録」初編、補編、続編いずれにも載録されていない。これはアメリカ National Archives の外交文書にファイルされていた「日華新報」368号(光緒34年10月9日、明治41年11月3日)によつたものである。

なお「民報」はさらに25、26号を出しているが、その編輯兼発行人は汪兆銘で、章炳麟はこれを偽民報といつている。発行所は法国巴黎侶漢街4号(4 Rue Broca, Paris)となつているが、実は日本で発行されたとのことである。

内務大臣鑒、前封還命令書、貴内務省筋全警視庁伝告牛込警署、令其懇切曉諭、以復受命令書為期、警署本奉命之地、署長特備役之人、權不己探、本編輯人兼發行人勿庸與之擄拒、当將命令書仍旧稿歸、然今有貴大臣告者、前經牛込警察署長当面告言「政事關於外交、不關法律」、本編輯人兼發行人、早聞北京伝説、扼云「唐紹儀此次塗維日本、將以清美同盟之威脅日本、又以間島領土之權、撫順炭砒之權、新法鉄道之權、啗日本」、今牛込警察署長之○相校、豪釐不爽、本編輯人兼發行人私謂貴国自有歴史以来、以剛毅體明称於天下、必不茹柔吐剛、以緘豪之利圭撮之害而俯首以就滿洲政府之羈輓、以撓隣国士民之氣、往者朱之願(舜水)以光復中原不勝、違難貴国、貴国士大夫至今称、本報立論、猶朱之願之志也、願豈前後異哉、貴国天性、尊君親上、世篤忠貞、

若以此推愛於滿洲政府、雖名實相違、而言出由衷、猶為世所共諒、若以威赫利啗之故、而以民報之革命宗旨與滿洲政府所贈利益交換、本編輯人兼發行人、寧為玉碎、不為瓦全、貴內務省既動合本報改變簡章、請以新假定六條主義務寫呈覽

- 1 滅盡世界立憲國
- 2 破盡世界偽平和
- 3 以中華帝國統一東亞
- 4 以專制政府壞逐蠻夷
- 5 不與獸性民連合
- 6 不求汚淫國贊成

若作是說、語語與現在簡章反對、未知貴大臣先許否也、嗚呼、國輿廣大、何所無託身之地、黃鵠一舉、識天地之四方、本報刊行、豈必局在東海、必若操之過蹙、即人人能作唐紹儀耳、吾黨人在美國者、已明言中美國民連合、變本加厲、或亦本報所有事、自茲以後、更不煩以「同文同種」酬酢之言、辱我炎黃遺胄矣、民報編輯人兼發行人章炳麟白十月二十三日

### 進德會

清朝最後の皇帝である宣統帝溥儀が退位し清朝が滅亡したのは、1912年2月12日のこと。その翌13日には袁世凱は北京に臨時政府を組織し、15日には袁世凱が臨時大總統に選ばれている。進徳会はこれと前後して生まれたものであつて、不狎邪、不賭博、不置妾を宗旨とし、その發起人は、李石曾、吳敬恆、張繼、王兆銘。その發起人の顔触れと、その宗旨と、その会員と、その設立の時期とをあわせ考えると、はなはだ興味深いものがある。

この進徳会の会約は「民立報」1912年2月26日号に、会員録は同紙27日号に、また女子部会約は同紙3月4日号にみえるので、次にそれらを転載する。

進徳会緣起 亡清之腐敗、積社会之腐敗而成、腐敗之原因、雖種種而自有其最普通之可約言者在焉、即「吃花酒」、「鬥麻雀」、加之以「討小老婆」是也、若民国新建、承其流而不如注意、將腐敗之根株不去、而濁敝之原氣難復、因發起為進徳会、広徵海内有道之士、相与邀約、為社会樹之風声庶新社会可以成立、而国風丕乎其變焉、

發起人 汪精衛兆銘 李石曾焜灑 張博泉繼 吳稚暉敬恆

△普通會約

本會無會長幹事等名目、亦無章程、不納會費、不設罰則、但憑會員介紹、即刊刻氏名、表字於冊中、使海內共知為進德會之會員、倘入會以後、違背所約、為同會察知者、但請全會為之脫帽不安、默懇加謹、因此為道德上之問題、有道之士、自能愛重社會、戒競於幽獨也、

入會之主旨

一、則吾人素不能謝絕惡緣者、籍此結會、可以隱相糾察、

一、則其人本有峻卓之畔岸者、亦可於外緣相擾之時、以已經入會之片言、簡單拒絕、

會約三條如左（下）、

不狎邪 不賭博 不置妾（已置者入會以後不再置）、

右（上）三條為當然進德、因禁阻置妾必纂入民國新律、將與狎邪賭博、同為犯法之事、故凡為進德會正式之會員者、以守當然進德三條、為資格之完全、倘現事止能謹守不狎邪不賭博之兩事者、可列為進德會贊成員、

△特別會約

別有數端、雖與普通會約三條大異、其性質、然常相牽累、或碍公德、或害衛生、亦培養新社會者、所當注意、故又設自然進德五條、分為甲乙丙三部、俾會員中之特別有所戒約者、改隸焉

甲部特別會員會約

不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏

（說明）官吏本服務於公家、應為社會所禮愛、但亡清時代之“官祿狂”亦為社會之蠹害、故除有道之士不得已而親入地獄、暫為公僕外、有願置身官吏以外、為官吏之師監者、社會之好尚、或少遷焉

乙部特別會員會約

不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏 不作議員 不吸煙

（說明）議員固所以代表人民監督官吏者、然外國之“議員熱”即籍以猖披其“官祿狂”、故既有議員監督官吏、又不能無稍有監督官吏之才能者立於議員之外以監督議員、於是庶幾而有一小部分之知道者、代報社記載、為政黨奔走、乃真為社會、非有心於個人之位置、

丙部特別會員會約

不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏 不作議員 不吸煙 不飲酒 不食肉

(説明) 有人以為列官吏議員与狎邪賭博、同為不德 未免不倫、然酒以成礼、肉以養生、準之世法、亦豈不德者、惟以特別改良社会之弊習、言自由進德之五者、亦誠為人類幸福之藁、不可不早加之意以入戒約、

進德会會員錄

會員 (不狎邪 不賭博 不置妾)

陶珣犀昌善 龐青城元徵 鍾養齋守頤 鈕湯生永建 魏注東宸組 黃秀伯中  
慧 蔡子民元培 洪德之鑄 顧蓋忱忠深 陶端一世鳳 陳通伯○沅 周叔銘延  
勳 章行啟士釗 徐天復血兒 王空海月派 邵仲輝聞泰 葉藻延永蔭 帥  
林慶潤身 李述膺龍門 徐大麟東洲 丁仁山義華 杜竹軒清廉

特別甲部會員 (不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏)

張博泉繼 張靜江人傑 陸仲英○育 丁芸軒寶書 戴天仇季陶 裘葆良廷  
梁 陸燦士爾奎 史子寬○教 孟庸生昭常 薛仙舟頌瀛 談善吾老談

特別乙部會員 (不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏 不作議員 不吸煙)

汪精衛兆銘 褚重行民誼 周佩箴廷紳 何劉生泰 周頌西延訓 周冠九國良  
薛竹孫智善 沈桐生震華

特別丙部會員 (不狎邪 不賭博 不置妾 不作官吏 不作議員 不吸煙  
不飲酒 不肉食—八不主義)

李石曾煜瀛 吳稚暉敬恒 廉惠鄉泉 王子沅沅

贊成員 (不狎邪 不賭博)

進德会女子部會約

1. 不間遊 2. 不作艷裝 3. 不吸煙 4. 不飲酒 5. 不賭博

なお進德会の會約が、"-----してはいけない" というのみで、積極的に

"-----をせよ" といわないことについては、次のように説明している。

社会之腐敗、積人而成、故進德会去人之腐敗、即所以去社会之腐敗、去其不德而德自進、故進德会約祇有去其不德之規定、(民立報、1912. 2. 27)

平民商会

小さな商人の上海総商会に対する不平不満は絶えなかつたが、五四運動に際してはそれが爆発して、「平民商会」なるものの結成をみるにいたつた。次に示すのは、上海日本商業会議所編「山東問題に関する排日状況」（大正8年12月20日発行）795・6頁の平民商会に関する記事を転載したものである。

之より先き総商（会）内の少数異分子野心家は、南市及租界の支那商約二千七百（と称す）と誘惑して総商会を中傷批難し以て平民商会なるものを組織し、（民国8年）6月下旬（25日）一の宣言書を發表して大に総商会の破壊を計画せるものあり、其事務所は南京路238号にあり、其中堅人物たる勿論不良なる分子なるを以て、官憲に於ても彼等の陰謀を黙許するものに非ず、其彼上海交渉員楊彥氏は8月11日北京政府に打電して「平民商会の件は一、二少数の無頼漢が世を騒がすために云為せるのみにして、平軍使道戸と合同して取調の上之を禁止せり云云」と報告せるに徴するも其成行を察知すべきなり、護（平と同じか）民商会の宣言書の概要を示せば左の如し。

吾人は総商会の吾等に対し何等の貢献なきを知る、我等は此重大の任務を果さざる彼等と談交するの余地を有せず、縱令上海に一萬の商人ありとするも租界内にて会員たるもの僅かに二百余、南市白を超へざるべし、其他と雖も会員たるを欲するもの多数なるべきも、総商会の入会料金なるものは一般商人の希望を満足せしむるべく高価に過ぐるのみか、現に会員たるものも之に反感を有するもの頗る多きを算す、吾人は茲に之を破壊せんとす、今一例を山東問題に引かんか、支那講和委員は平和条約に調印せざる旨を發表せしに拘らず、総商会々員は日本の意嚮に添はんがための電報を北京政府に致したり、此事たる不正義の最も甚しきものなりとす、元來総商会なるものは一般商人の意見を徴し、当業者の親和交通を謀り商取引の順調を尽すを以て使命とするものなり、然るに吾現在の総商会は如何、一言以て之を覆へば其存在は無に等しく彼等会員は余りに独單的不代表的なり、総商会に対する一般商人の不平は排日貨以來益々其度を加へつつあり、維れ或は一時的現象なるや測られずと雖も、此種実例を挙げれば説くに暇を有せず、於茲乎吾人は爰に新に平民商会を創立し以て大に一般商人のため尽す所あらんとす云云。

＜ 編輯 後 記 ＞

会報第4号をおとどけするのが、こんなに遅くなりましたことを、まずお詫び申し上げます。

この号から、委員会に関する記事のほかに、次のような欄を新設することにしました。

内外ニュース 内外の近代中国研究に関する情報を伝えます。

批評と紹介 いわゆる書評のほかに、できるだけ多くの委員会に入つた新刊書を簡単に紹介  
します。

近代中国研究論文目録 最近の研究論文にはどんなものがあるか、ということなるべく早  
く伝えます。

文献解題 今回ののはすべて佐々木正哉君がワシントンから送つてきたものですが、次号から  
は、東洋文庫・本委員会の蔵書を主として解説していくつもりです。

資料紹介

近代中国を研究する機関も人もたくさんありますが、互に他が何をしているのか、どんな資料  
をもっているのか、ということが、なかなかわかりません。このようにバラバラになつて  
いる研究機関、研究者を、多少でも結びつけることができればと思つて、このような欄を  
新設したわけです。したがつて、これらの欄の中で特にこれから充実させたいのは「内外  
ニュース」ですが、それには他の研究機関や研究者の協力をまたねばなりません。この  
号に情報を寄せて下さつた中国研究所の幼方直吉氏に謝意を表するとともに、内外の  
研究機関、研究者が、今後ドンドンこの種の情報を提供して下さいを切望してやみ  
ません。次号は9月に発行する予定です。

本号の編輯は、中山餃子さん、三浦和子さん、山崎妙子さんとわたくしとが致しました。  
不慣れなのと非常にいそぎましたために、体裁の悪いものになつてしまいましたが、  
次号からはもう少し整えるつもりです。また本号にみえる署名のない記事は一切わたくし  
ち編集部で作製したものです。その責任はあげてわたくしにあります。

なお本誌にみえる書名の後の間架番号は、東洋文庫、本委員会のそれです。もちろん  
記載もれのものもあると思いますが。(1958年3月20日、市古宙三)

